就学前教育カリキュラム

改訂版

参考事例集

大　阪　市

平成３１年　月

参考事例について

乳幼児の心身の発達は、それぞれが独立して発達するものではなく、関連し合いながら総合的に培われていきます。

乳幼児期には、「知・徳・体」がバランス良く育まれるよう、総合的に発達を促していくことが大切です。「知・徳・体」それぞれのラーニングデザインの中に示している指導者・保育者の働きかけも、それぞれ独立して行うものでなく、乳幼児期の実態に応じ、指導者・保育者と乳幼児の信頼関係の中で、その活動に応じて総合的に行っていくことが大切です。

ここに示した参考事例は、総説に示した「就学前教育カリキュラムの考え方」に則って実践されたものです。また、改訂に伴い、次の点を明確にしながら作成しています。

・一つの事例において、指導者・保育者の教育的意図をもった働きかけが複数の視点（知・徳・体）を踏まえていること、そして総合的にバランス良く育むことを意識した実践を事例にしています。
・ねらいを踏まえ、特に重要だと思われる教育的意図をもった働きかけの視点に網掛けをしています。（例　知）
・指導者・保育者の教育的意図を具体的に示しています。
・参考事例の中に記載している「子どもと指導者の姿」の中で、子どもの姿からつながる主な「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」に着目し、表記しています。
・考察においては活動のねらいに沿って保育実践を振り返るとともに、小学校教育への接続を意識し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を記載しています。また、振り返りから今後どのように遊びを継続し、展開していくのかを「今後に向けて」として、記載しています。

なお、今回の改訂版では、平成 27 年度策定の「就学前教育カリキュラム」の課題を受けて、『徳』の参考事例を充実させ、全体として４３事例を掲載しています。

※　総説に示した「歳児・月齢・期の育ち」はあくまでもめやすであること、また子どもたちの育ちは一人ひとり異なることを十分理解したうえで、担当する子どもたちの実態を、総説に示した「歳児・月齢・期の育ち」と照らし合わせながら参考事例を活用していただきますようお願いいたします。

また、各歳児のラーニングデザインの中に、教育的意図をもった働きかけを、より具体的に示している事例番号を掲載していますので、総説と参考事例を関連させて活用していただきますようお願いいたします。

教育的意図をもった働きかけの視点と観点

視点	観点
知	言語　思考　創造
徳	人と関わる力　規範意識　生命の尊重
体	運動　基本的な生活習慣　健康・安全　食育

事例一覧表

	番号	時期	視点	事例名	項
0歳児	1	6か月頃 ～9か月頃	徳	せんせい　だいすき ～安定した関係の中で、意欲が芽生える～	P.1
	2	9か月頃 ～12か月頃	徳	いないいないばあっ！　みぃつけた ～周りの環境に興味・関心をもち、自分でやってみようとする～	P.3
	3	1歳頃 ～1歳3か月頃	知	なにがあるかな？やってみよう！ ～自分の好きな遊びを見つけ、やってみようとする～	P.5
	4	1歳頃 ～1歳3か月頃	体	もぐもぐごっくん　おいしいね！ ～安定した保育者との関係の中で意欲的に食べる～	P.7
1歳児	5	1歳3か月頃 ～1歳6か月頃	知	てあそびたのしいな ～手遊びを楽しむことを通して感性と意欲を育てる～	P.9
	6	1歳3か月頃 ～1歳6か月頃	体	いっしょに　よいしょ！ ～保育者との安定した関係のもと、身の回りのことに興味をもつ～	P.11
	7	1歳6か月頃 ～1歳9か月頃	知	しんぶんし、びりびりたのしいな！ ～身近な素材で感触遊びを楽しむ～	P.13
	8	1歳6か月頃 ～1歳9か月頃	徳	エプロンどうぞ ～保育者との関わりを通して友達に関心をもつ～	P.15
	9	1歳9か月頃 ～2歳頃	知 徳	いやいや！あそびたい！！ ～受け止めてもらえた心地よさを感じる～	P.17
	10	1歳9か月頃 ～2歳頃	知	カレーライスおいしい！ ～保育者が仲立ちとなり簡単なやりとりを楽しむ～	P.19
	11	1歳9か月頃 ～2歳頃	体	からだをうごかすってたのしいね ～保育者と一緒に身体を動かして遊ぶ～	P.21

	番号	時期		視点	観点	事例名	項
2歳児	12	I期	5月	徳	人と関わる力	せんせい、またしようなぁ～ ～安心できる保育者とふれあいあそびを楽しむ～	P.23
	13		5月	体	運動	おもしろかったなぁ ～保育者や友達と一緒に身体を動かして遊ぶ～	P.25
	14	II期	7月	知	創造	ペタペタ、ポンポンたのしいなぁ ～保育者や友達と一緒に感触遊びを楽しむ～	P.28
	15		7月	体	食育	はやくたべたいなぁ ～食べることに興味や関心をもつ～	P.30
	16	III期	11月	徳	人と関わる力	やったー!!　かぶぬけた ～保育者や友達と一緒に“おおきなかぶごっこ”を楽しむ～	P.33
	17	IV期	2月	知	言語	カエルおってよかったなぁ!! ～保育者や友達と言葉のやりとりを楽しむ～	P.36
3歳児	18	I期	5月	知	創造	にょろにょろって。にょろにょろ！ ～絵本を通して、表現することを楽しむ～	P.39
	19		5月	体	運動	おでかけ、楽しかったね ～フープの遊びを楽しみ、体を動かす心地よさを感じる～	P.42
	20	II期	6月	知	思考 創造	“のんちゃん”もいっしょにいこう ～身近な自然に興味や関心をもち、収穫をしたり、ごちそうをつくったりする～	P.44
	21	III期	9月	体	運動	先生、見て！できた！！ ～やってみようという気持ちをもって、体を動かすことを楽しむ～	P.47
	22		10月	徳	規範意識	駅に来たら、代わってね ～友達と遊具で遊ぶ中で、順番や交代することを知る～	P.49
	23		10月	徳	人と関わる力	先生見て！お芋になったよ ～友達と一緒に表現する楽しさを味わう中で、人と関わる力を育む～	P.52
	24	V期	2月	知	創造	飛行機できた！見て、見て ～身近な素材に興味や関心をもち、つくることを楽しむ～	P.55
	25		3月	徳	人と関わる力	お相撲ごっこ、応援したのがおもしろかった ～安心して遊び、自分の思いを素直に出す～	P.57

	№	時期		視点	観点	事例名	項
4歳児	26	I期	4月	知	思考 言語	ダンゴムシのお家をつくろう ～ダンゴムシと触れ合い、友達と話し合いながら 関心をもって関わる～	P.59
	27		5月	知 徳	思考 生命の尊重	でも、お空飛びたいって思ってるよ ～アオムシを育てる中で、親しみをもち、 命の大切さに気付く～	P.62
	28	II期	6月	徳	人と関わる力 協同性	やったぁ　つながった！！ ～泥だんごつくりを通して、友達と一緒に 目的をもって遊ぶ～	P.65
	29		8月	体	運動 健康・安全	楽しい！魚になったよ ～友達と一緒に存分にプール遊びを楽しむ～	P.68
	30	III期	9月	知 徳	思考 人と関わる力	給食当番　コップたりないよ ～当番活動を通して数量の興味・関心を広げる～	P.71
	31	IV期	12月	体	健康・安全 基本的な 生活習慣	かぜバイ菌をやっつけろ！ ～『咳エチケット』・手洗いの大切さを知る～	P.74
	32	V期	2月	知	言語	もう１回　レンガのお家に行こう！ ～友達と思いを出し合いながら、 言葉のやり取りを楽しむ～	P.77
	33		2月	徳	人と関わる力 規範意識	みんなと一緒だから楽しいな ～（バナナ鬼ごっこを通して）友達と一緒に ルールのある遊びを楽しむ～	P.80
5歳児	34	I期	4月	徳 知	人と関わる力 言語	「大丈夫」って言ってあげる ～新入園児と触れ合いながら、年長の自覚をもつ～	P.83
	35		5月	知 体	思考 運動	風車と一緒に走ったら楽しいなぁ！ ～風を受けて力いっぱい走る心地よさを味わう～	P.87
	36	II期	5月	知	思考	いっぱいとれたなー ～エンドウの収穫から、数量に関心をもつ～	P.90
	37		7月	知	創造	ぴったり合ったぁ ～リズム遊びを通して、友達と音が揃う 楽しさを感じる～	P.94
	38	III期	9月	徳	人と関わる力 規範意識	ぼくら走ってへんやん ～リレー遊びを通して、 ルールを守る大切さに気付く～	P.97
	39		10月	徳 体	規範意識 運動	座ってたら、タッチできない ～体を存分に動かして遊びながら、 ルールを考える～	P.101
	40	IV期	11月	知	思考 創造	まあるいのじゃないとあかんねん!! ～いろいろな材料を選んで つくる楽しさを味わう～	P.104
	41		12月	知	思考	明日、氷できてますように！ ～氷づくりを通して自然の変化に関心をもち 探求心、好奇心を高める～	P.108
	42	V期	1月	知	言語 思考	まわった！もっとやってみよう ～工夫や考えを「見る」「伝える」ことで、 楽しさを共有する～	P.111
	43		2月	徳	人と関わる力	一緒に縄跳びしよう！ ～小学生との交流を通して、自信をもち 就学への期待を高める～	P.114

事例の見方

４歳児　＜ 体　Ⅱ期・８月　運動　健康・安全　＞

「楽しい！魚になったよ」

～　友達と一緒に存分にプール遊びを楽しむ　～

＜これまでの取組＞

泥んこ遊び、色水遊び、プール遊び等夏季ならではの遊びを楽しむ中で、泥や水の感触を味わっている。プール遊びを始めた頃には、顔に水がかかることに抵抗がある子どももいたが、プールでのいろいろな遊びを通し、経験を重ねるごとに少しずつ水に慣れ、プール遊びの楽しさを知り、存分に身体を動かし、楽しめるようになってきた。また、プール遊びでの約束やきまりをみんなで守って活動しようとする姿も見られるようになってきた。

＜本活動のねらい＞

・水に慣れ親しみ、友達と一緒にプール遊びの楽しさを味わう。
・プール遊びの約束やきまりを守って安全にプール遊びを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・存分に水の感触を味わいながら、プール遊びを楽しめるようにする。
・きまりを守って安全に、いろいろな遊びを楽しめるようにする。

子どもと指導者の姿　指－指導者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○水着に着替え準備体操をする 指　「さあ、元気いっぱい体操しようね」 A　児「そうやで、体操ちゃんとしないと足が痛なるって、僕のお兄ち 健康な心と体、言葉による伝え合い等	体子どもの経験や身近な人からの話等身に付いていることを認め自ら安全に活動することを意識できるようにする。
B　児「お日さま、いっぱい出てるからな～」 C　児「お日さまは、すごいなあ～」 思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等 指　「お日さまのお蔭で気持ちいいね、今日はいっぱい遊べそうだね、さあ、今日は何して遊ぼうかな？」	知子どもの発見を受け止め共感し、水温の変化の不思議さについて考えていけるようにし、水の不思議さに興味がもてるようにする。 徳子どもの思いに共感し、プール遊びに期待がもてるようにする。

【考察】

・プ　やきまりを子どもたちに伝えたり、経験や予測から一緒に　る中で、子どもたちが守ることの必要性を感じ、安全を意　（健康な心と体、言葉による伝え合い等）

ポイントになる具体的な働きかけの言葉

指導者の「教育的意図をもった働きかけ」（知・徳・体の視点から）

子どもの具体的な姿からつながる主な「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

事例１

０歳児　＜　徳　６か月頃～９か月頃　＞

せんせい　だいすき

～　安定した関係の中で、意欲が芽生える　～

＜これまでの経過＞

４月から入所した３名（A児８か月、B児、C児９か月）のクラスで、担任は１名である。入所当初はよく泣いていたが、抱っこやおんぶなどで保育者が十分に関わり、気持ちを受け止め、優しく言葉がけしていくことで、少しずつ愛着関係を築いてきた。入所から２か月が過ぎ、担任がそばにいることで安心し、次第に周囲のものに興味をもち、何だろう？と手を伸ばし、自分で触って試したいという意欲が見られるようになってきた。

＜本活動のねらい＞

・保育者との安定した関係の中で、安心して過ごす。
・玩具に興味をもち、触れたり、手に取って試したりしてみたいという意欲をもつ。

＜本活動での教育的意図＞

・保育者との愛着関係を築いていくことで、安心して過ごせるようにする。
・安心できる保育者が応答的に関わることで、周りの物に興味をもち、触ってみたいという気持ちがもてるようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○朝のおやつ後、子どもたちは保育者と一緒に過ごしている。 保　「あっちに遊びに行こうね」と声をかけ、少し離れた遊びのスペースへ移動する。 A　児保育者がそばを離れる姿を見て不安がり、ずりばいで泣きながら保育者の方に向かって移動しようとする。 保　「大丈夫、ここにいるよ」と言いながら、A児のそばに戻る。 A　児保育者の姿を見て、ずりばいをやめて泣き止み、一人で座る。 保　「Aちゃんも行こうね」とA児に向かって両手を差しのべる。 A　児両手を上にあげ、抱かれようとする。 保　A児を抱き上げ、遊ぶスペースへ行く。 保　「おもちゃがいっぱいあるね」と話しかけながら、A児を保育者の膝の前に座らせる。 保　「どれにしようかな？」と色鮮やかな積み木をA児の前に並べる。	知言葉がけや先に保育者が行動することで、言葉と行動が一致するようにしていく。 徳不安感を示し、後追いしてきた子どもに対して、気持ちを汲み取り、そばにいることを伝え、安心できるようにする。 知子どもに両手を差しのべて受け止めようとすることで、子どもが自分から「抱っこして」の意思表示ができるようにする。 知色鮮やかな積み木を子どもの手の届く所に並べることで、興味を示し、自分で手に触れたいという意欲がもてるようにする。 体子どもの発達や状態に合わせ、い

A　児後ろを振り向いて、保育者がいることを確認し、「あーうー」と発声しながら、玩具に手を伸ばして指でつかみ、じっと見たり、反対の手に持ち替えたり、なめたりする。 健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等	ろいろな環境を用意することで、指で玩具をつかんだり、持ち替えたりする経験ができるようにする。
○保育者はA児・C児に応答的に関わりながら、少し離れた所にいるB児の方にも目を向ける。 B　児保育者がそばにいないことに気づき、腹ばいの姿勢で左右に方向転換しながら、保育者を探す。見つけると保育者を目指してずりばいで移動する。 保　「Bちゃん、ここよ」と声をかける。 B　児保育者のそばまで来ると、保育者の膝に両手を乗せる。 保　B児を抱き上げて、目を合わせて「Bちゃん、来たね～、ずりずり、上手だったね」と声をかけながら微笑みかけ、ぎゅっと抱きしめる。 B　児嬉しそうににっこり笑う。 健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等	体ずりばいが安全にできるように環境を整え、見守ることで、十分に体を動かすことができるようにする。 徳ずりばいで保育者のそばまで来られたことを、抱きしめたり言葉で伝えたりして温かく受け止めることで安心感や満足感がもてるようにする。

【考察】

・入所当初は不安感が強く、よく泣いていたが、保育者が抱っこやおんぶをしてふれあいを多くもち、優しく言葉がけをすることで、担任との信頼関係を築き、安心して保育所で過ごせるようになった。そのことが基盤となり、睡眠や食事などの生活リズムが安定し、周囲の物への興味や遊びへの意欲につながってきている。また、保育者が子どもの表情や動きから子どもの気持ちを理解し、愛情をもって応答的に関わることで、人への信頼感が育ってきている。何か行動するときには保育者が「～しようね」と話しかけてから一緒に行動し、丁寧な言葉がけをすることで、子どもの言葉の理解や発語への意欲につながる。保育者が「上手だったね」とほめながら抱きしめることで、子どもが喜びを感じ、自身への肯定感をもつことになると感じた。

（健康な心と体、自立心、言葉による伝え合い等）

・担任との愛着関係ができ始めると、保育者が抱っこをしたり、担任の膝の上に座らせたりし、玩具を見せながら、一緒に関わって遊ぶことで、子どもが次第に玩具に興味を示し、手を伸ばしてつかむようになってきた。また、保育者が見守っていると、少し離れた所にある玩具にも興味をもち、寝返りやずりばいで移動して、玩具を手に取るようになってきた。このように保育者は、いろいろな物に興味、関心を広げていくことができるよう働きかけていく必要がある。

（健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等）

今後に向けて

・今後ますます探索活動が盛んになり、行動範囲が広がっていくことが予想できる。安全面や衛生面等に留意し、子どもの発達を把握しながら、その時期に応じたいろいろな遊びを経験させ、様々な環境と触れ合っていくことができるよう意識して保育していく必要性がある。

事例２

０歳児　＜　徳　９か月頃～１２か月頃　＞

いないいないばあっ！　みぃつけた

～周りの環境に興味・関心をもち、自分でやってみようとする～

＜これまでの経過＞

４月から入所した３名（A児 12 か月、B児 10 か月、C児９か月）のクラスで担任は１名である。A児はつかまり立ちから数歩歩く姿があり、B・C児は、腹ばいや寝返りが中心で、ずりばいで移動する姿が見られるようになってきた。入所後３か月経ったが、担任との関係は安定し、後追いして泣く姿も見られる。個々の生活リズムで過ごしているが、同じ玩具に興味をもつ点は似ており、３人が機嫌のよい時は、ボール等の玩具を使って、同じ場所で遊ぶようになってきた。

＜本活動のねらい＞

・保育者との安定した関わりを基盤に、周りの大人や友達に興味をもつ。
・保育者がしていることに興味をもち、自分でやってみようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・身近にいる大人や他児の存在を知らせていくことで、周りの環境に興味・関心がもてるようにする。
・保育者が先回りせず、指さし等子どもからの要求を待つことで、意思や要求が高まるようにする。

子どもと保育者の姿　保ー保育者　子ー子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○保育者が室内での遊びへ誘う C　児うつ伏せで、好きな玩具で機嫌良く遊ぶ中、保育者の顔を見て「あぁ、あぁ」と声を発する。 保　子どもと同じ玩具を手に持って見せながら「いないいないばあっ」と声をかける。 C　児「ばあっ」の声かけに合わせて体を上下させて喜ぶ。 保　次は手で顔を覆って再度「ばあっ」と声をかける。 A　児保育者の「ばあっ」の声に反応しそばに寄って来る。 B　児保育者の方を向こうと座ったまま体をねじる。 保　「A ちゃん B ちゃんもする？」「おいで」と声をかけ、3人と向き合い「いないいないばあっ」をする。 A　児保育者の真似をして「ばあっ」と言葉を発する。 B・C児うれしそうな声を上げて喜んでいる。豊かな感性と表現等	知子どもの発語や表情、自己表現を受け止め、子どもの自発的な活動を大切にしながら保育者がしてみせるなど、一緒に関わって遊ぶ。 知興味のある物が隠れたり見えたりする楽しさを伝え、次の展開に期待がもてるようにする。
○保育者はレースの布を準備し保育者が頭に被って「いないいないばあっ」をして見せる。 子　保育者の言葉と同時に手を伸ばし、布に触れようとする。	知布を取り払うことで興味がある物が見えることを知らせ、手を伸ばして触れたいという意欲や好奇心を育むようにする。

保　再度保育者が布を被り「いないいないばあっ」と言う。 A　児保育者の布を取り「ばあっ！」と言葉を発する。 B・C児手を伸ばし「あー」と言いながら体を揺らす。	体子どもの扱いやすい素材と大きさの布を使い、つまむ・引っ張る等、手、指を使う遊びに誘う。
保　「次はCちゃん、いくよー」「いないいない」と子どもの頭に布を被せる。 C　児布を両手で引っ張り「ばあっ」と言うように口をあける。 B　児保育者の顔を見ながら、期待して待っている様子が見られる。　思考力の芽生え等	徳透ける素材や柔らかい感触のレースの布を使うことで、子どもが安心して同じ遊びが繰り返し楽しめ、もっとやって欲しいという気持ちがもてるようにする。
保　「じゃあ　Bちゃんもするよ」 B　児保育者にかけてもらった布を手で引っ張って外し、にこっと笑う。	
保　「上手、上手　ばあっだね」と楽しさを言葉にする。 A　児一緒に「ばあっ」と言う。 C　児体を揺らし楽しんでいる 豊かな感性と表現等	徳保育者は応答的に関わることで、楽しいという気持ちに共感する。
保　「C ちゃんまたする？」と布を被せる。 ○そばで見ている A 児が手を伸ばし C 児の布を引っ張り「ばあっ」と C 児の顔を見る。C 児も布に手を伸ばし体を上下させて喜んでいる様子が見られる。　豊かな感性と表現等	徳保育者と楽しんでいる遊びを子ども同士でもできるよう投げかけていくことで、他児の存在に気付けるようにする。

【考察】

・入所後３か月ではあるが、保育者と信頼関係を築き、安心して過ごせるようになった。保育者の働きかけに安心して応える姿があり、保育者と一緒に遊ぶことで、いろいろな意欲へと繋がっている。普段から、保育者が表情豊かに応答的に言葉をかけるなど丁寧に関わろうとすることで、積み重ねた信頼関係をもとに、子どもたちは初めての活動でも興味を示すようになってきた。また、対象物を、手で隠す・布で隠す・子ども自身が隠れる等、遊びを次々と発展させていくことで、子どもが自分でやりたい・触りたい・引っ張ってみたいという意欲が高まって行動し、見つけた時の満足感にもつながっている。　（思考力の芽生え等）

・「いないいないばあっ」という、ゆったりした心地良い言葉がけと共に遊びが展開するので、子どもたちも動作と音がつながりやすく、対象物が見えるタイミングで「ばあっ」と発声して、共感することができた。保育者を中心にして身近な友達と、同じ遊びを共有し楽しさを共感することで、他児の存在も意識できるようになり、自分から関わろうとする姿も見られた。

（豊かな感性と表現、協同性等）

今後に向けて

・今後、体の成長発達も進み、はいはいや歩行が始まると、もっと探索活動に広がりが見られるようになってくると思うが、保育者の応答的な関わり、育んだ信頼関係をもとにすることで、初めて経験する活動も安心感をもって意欲的に取り組めると感じた。その際には、子どものサインを見逃さず、子どもの気持ちに寄り添いタイミングよく関わることが、遊びを広げていく上で大切なことだと思う。

事例３

０歳児　＜　知　１歳頃～１歳３か月頃　＞

なにがあるかな？やってみよう！

～　自分の好きな遊びを見つけ、やってみようとする　～

＜これまでの経過＞

４月から入園した０歳児５名（１歳３か月２名、１歳２か月２名、１歳１名）のクラスで、担任は２名である。保育者との関わりの中で、少しずつ園生活にも慣れ、笑顔も見られるようになり、発語も増えてきている。

身近な物に興味、関心をもち、探索活動を十分に楽しめるように、子どもが自分で好きな玩具を見つけ、取り出せるような環境を工夫している。子どもが自分で玩具を取りに来たときには「見つけたね」「取れたね」と声をかけ、一緒に遊ぶようにしている。

泣いている子どもには、抱っこをしたり、わらべうたを歌ったりして触れ合い、落ち着いたら、「これ何かな？」「こんなのあるよ」と玩具に興味がもてるよう言葉をかけ、関わっている。

＜本活動のねらい＞

・保育者との安心・安定した環境の中で、自分の好きな遊びを楽しむ。
・手、指を使った遊びに興味をもち、自分でやってみようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・安心できる保育者と一緒に遊びながら、遊びに興味をもち、好きな遊びを楽しむことができるようにする。
・手、指を使った遊びを楽しめるようなしかけや工夫をすることで、遊びへの興味や関心を広げ、やってみたいという意欲の芽生えを育んでいくようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○朝のおやつが終わり、マットの上に座る。 A　児ガラガラを片手に持ち、振って、音が鳴るのを楽しんだり、玩具が置いてあるロッカーのところに行って、気になる玩具を触ったりしている。やがて、箱に入ったフェルトのマスコットに興味を示す。	徳子どもが好きな玩具や遊びを見つけたり、興味をもった玩具で遊んだりできるように、スペースを準備する。
保　フェルトのマスコットが入った箱をロッカーから出し、A児の前に置いて、取りやすいようにし、箱から１つ取り「どうぞ」とA児に渡す。	知子どもが手に取り、つかみやすいようなマスコットを見せることで、子どもの興味を引き出し好奇心をもたせるようにする。
A　児それを手に取り、握ったり振ったりしている。その後マスコットをその場に置くと、次は自ら、箱に手を入れてマスコットを取り出す。　思考力の芽生え等	
保　A児が遊んでいる姿を見守りながら、「取れたね」「うれ	徳できたことについて言葉をかけ、

しいね」などとタイミングよく声をかけ、自分で取れたことを一緒に喜び合う。 A 児保育者の言葉を聞き、答えるように笑顔を見せ、「あ！」「あっ」など声を出す。 保 A児の手に合うような容器を用意し、「ここに入れてみよう」と誘いながら、保育者がいくつかマスコットを入れる。 A 児興味を示し、じっと見つめる。 保 容器をA児に渡し、「ここにも入るかな？」「入れてみよう」と声をかける。 A 児容器を持ち、まずはじっくりと容器を観察している。それから保育者と同じようにマスコットを中に入れる。 保 A児の様子を見ながら「わぁ、入ったね、もっと入れる？」と誘う。 A 児次に入れるマスコットを探し、箱から取り、入れる。 〇B児、A児や保育者の様子に興味をもち近づいてくる。 保 「Bちゃんもやってみる？」と声をかけ容器を渡し、「入れてみるね」と１つ保育者がマスコットを入れる。 B 児マスコットをつかみ、容器に入れて入ると笑って喜ぶ 保 「Bちゃんも入ったね、よかったね」 「おもしろいね」 A・B児容器にマスコットをたくさん入れて遊ぶ。 いくつか入ると、ひっくり返して全部出したり、容器からマスコットをつかんで出したりして遊ぶ。繰り返し、出し入れを楽しむ。隣同士に座り遊んでいる。 健康な心と体、思考力の芽生え等	一緒に喜び、遊ぶことで、やってみようとする気持ちを引き出す。 知保育者が実際に遊びながら見せていくことで、保育者の動きを模倣しようとする気持ちを引き出す。 徳子どもの指さしやできたことを認め、応答していくことで、保育者とのやり取りを楽しめるようにする。 知保育者がして見せるなど関わって遊ぶことで、マスコットをつかんで、容器に入れるという遊びに発展させていく。 徳子どもの気持ちを受け止め共感することで、「もっとやってみよう」という意欲につなげていく。 体繰り返し遊びを楽しませることで、目と手の協応を養ったり、手、指の機能を高めたりすることができるようにする。

【考察】

・保育者が子どもの様子を見守り、安心して過ごせる環境を作ることで、子どもが自ら好きな遊びを見つけることにつながった。そして、子どもが興味を示している遊びに保育者が関わることで、子どもの「やってみたい」という気持ちを引き出すことができると感じた。さらに子どもの気付きや発見、できた喜びなどに共感し、代弁したり応答的に関わったりすることで、子どもの興味や関心が広がっていくと考える。（自立心、思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

・手、指を使ってマスコットを出し入れする遊びを楽しむためには、じっくりと見て思ったところに手を伸ばし、つかんで離す必要がある。手足を自由に動かすためには、まずは体幹を安定させる必要があると感じた。また、子どもの自発的な活動を大切にしながら、保育者がしてみせるなど、一緒に関わって遊ぶ大切さも感じた。（健康な心と体等）

今後に向けて

・一人ひとりの発達段階を踏まえ、道筋を描きながら、子どもの遊びを見守る必要があると感じる。玩具や遊びを提供するときも、０歳児５名が同じ遊び方をするわけではないので、常に個々に応じた教育的意図をもった働きかけを考えるとともに、育みたい力を意識していく必要がある。

事例４

０歳児　＜　体　１歳頃～１歳３か月頃　＞

もぐもぐごっくん　おいしいね！

～　安定した保育者との関係の中で意欲的に食べる　～

＜これまでの経過＞

４月から入所の０歳児３名（1 歳、1 歳３か月、1 歳４か月）で担任は１名である。1 歳児と同じ部屋で一緒に過ごしている。家庭での離乳食の進め方のペースはゆっくりで食べさせてもらっているようである。保育所でも入所当時は、給食やおやつがなかなか食べられず泣いていたが、少しずつ担任にも慣れ、安定した中で落ち着いて食べることができるようになってきている。

＜本活動のねらい＞

・安定した保育者との関係の中で、こぼしながらも自分でコップを持って飲もうとしたり、食べようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・落ち着いた雰囲気の中、安心できる人と一緒に食事をすることで、自分でやってみよう（食べてみよう・飲んでみよう）という気持ちがもてるようにする。

子どもと保育者の姿　保ー保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○保育者が椅子に座った子どもたちの前でおやつの準備を始める。	徳座る場所を決めておくことで、毎回同じ場所に座る安心感を味わえるようにする。
A・B児保育者が エプロン等を着用する様子をじっと見ている	知保育者のエプロン等の着用を見せることで、食事の時間ということが分かるようにする。
保育者一人ずつ顔を見て名前を呼びながらエプロンを配る。また直接身体に触れるなどして顔色、体調等を確認する。	
保　A 児の名前を呼びながら「いただきます」の挨拶を一緒にする。保育者がA児のコップを持ち「どうぞ」とすすめながら一口お茶を飲むように促す。	
A　児ゴクッと一口飲む。	
保　A 児と一緒にコップを持ち、保育者が手を添えながら、「Aちゃんお茶飲むよ。ごくごくしようか」と声をかける。	体誤嚥の防止のため、食べる前に必ず水分を摂取するよう促す。
A　児コップを触るが飲もうとはせず、保育者を見つめる	徳一人ひとりの状況を把握し、個々に応じた言葉がけや励ましをすることで、自分でやってみようという意欲を引き出す。
保　コップに手を添えながら口元まで一緒に運び、飲み始めたらそっと手を離し「上手に飲めたね、おいしいね」と言葉がける。	
○保育者はおやつの蒸しパンを、A 児が食べやすいサイズにフォークで小さく切る。	

A　児蒸しパンを興味深く見つめた後、自分でつかもうとする。 保　「自分でつかめたね。お口に入れてみようか？」 A　児蒸しパンを口に入れ、感触を確かめている。 保　「どう？おいしい？」 「もぐもぐして見る？」と保育者が口を動かして見せる。 A　児保育者の口元を見ながら、口を動かし食べ始める。そして皿に手をのばして次々食べ始める。 健康な心と体、自立心等 保　自分で食べきることができるように、さりげなく援助しながら、「おいしいね」と声をかける。 保　嚥下を見守り、途中適時コップでお茶を飲むように促す。 保　空っぽになったコップと皿を見せ、「おいしかったね。空っぽだね。ごちそうさまでした」とおやつが終わったことを伝える。 保　おしぼりで子どもの口をふき、目の前でおしぼりとエプロンをたたみ、子どもと一緒に「ごちそうさま」の挨拶をして終わる。	体保育者が口を動かして具体的に見せることで、咀嚼をイメージし、食べる意欲につながるようにする。 徳「おいしいね」と言葉がけ、共感することで、自分で食べようとする意欲を引き出していく。 知コップの底を見せ、残りの量を知らせ「空っぽ」「おしまい」が分かるように伝える。 徳おいしかった気持ちを言葉にして代弁し、満足感を味わえるようにする。

【考察】

・食事（給食・おやつ）は、子どもの生理的欲求を満たすことを保証するためにも、まずは大人との安定した信頼関係を築き、落ち着いた雰囲気の中、食事することが基本である。保育者が表情豊かに受容的かつ応答的に言葉がけ、手本を示すことで、初めての経験も受け入れてやってみようという気持ちを引き出せることができると考える。（自立心等）

・まずは、子どもが意欲をもてるように言葉がけ、手を添えて自分で食べる経験を増やしていく。うまく口に入った時に共感し、受け止めていくことで次への意欲につなげていくことができた。（健康な心と体、自立心等）

今後に向けて

・基本的な生活習慣の中でも特に食事に関しては、家庭と連携し進めていく必要がある。そこで保護者に保育所での姿を知らせたり、具体的な援助方法を伝えたりするなど、保護者と共に子どもの成長を共通理解し、関わっていくことが大切だと考える。

事例５

１歳児　＜　知　１歳３か月頃～１歳６か月頃　＞

てあそびたのしいな

～　手遊びを楽しむことを通して感性と意欲を育てる　～

＜これまでの経過＞

１歳児クラス５月生まれから３月生まれまでと月齢差の大きい 12 名の集団で担任は２名である。持ち上がりではないが、新担任にも甘え、機嫌よく過ごしている。新入児においては、４月はよく泣いている姿が見られたが、その都度保育者がしっかりと受け止め、十分に触れ合い、気持ちに寄り添いながら関わってきたところ、だんだんと好きな玩具を見つけて遊び落ち着いて過ごす時間が多くなってきている。また、体操や手遊び、歌などを毎日繰り返していくことで、保育者の真似をして友達と一緒に手遊びをする楽しさが感じられるようになってきた。

（A児１歳４か月・B児１歳６か月・C児１歳３か月）

＜本活動のねらい＞

・保育者と一緒に手をたたいたり、まねたりしながら一緒に手遊びをする楽しさを味わう。
・手遊びを通して体を揺らしたり、手を動かしたりする楽しさを味わう。

＜本活動での教育的意図＞

・安心できる保育者と一緒に手遊びをすることで楽しさを共感し、一緒にしてみたいという気持ちを引き出せるようにする。
・子どもの興味や発達に応じた手遊びをすることで、体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるようにする。

子どもと保育者の姿　保ー保育者　子ー子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○朝のおやつの時間に子どもが椅子に座る 保　「トントン　アンパンマンする？」と話しかける。 B　児「うんうん」と頷き、「パンマン」と言う。 言葉による伝え合い等 保　「アンパンマンしようね」「Aちゃん、Cちゃんも一緒にしようね」とA児、C児に誘いかける。 保　まだ自分ではなかなか手振りをすることが少ないA児のそばで、子どもたちに見えるように手遊びを始める。手遊びをしながら、手振りをしている子どもと目を合わせて、「上手、上手」と声をかける。 B　児笑顔ではりきって大きく手を動かす。 C　児保育者に抱かれ、笑って見ている。 A　児保育者をじーっと見ながらにこにこしている。 子　『アンパンマン』の手遊びが終わると、高月齢児が	知・徳子どもの興味や発達に応じた手遊びを行うことで、一緒にしてみたいという気持ちを引き出す。 徳子どもの表情やしぐさに応じて優しく笑顔で応えることで、できる喜びを感じられるようにする。

『むすんでひらいて』の手ぶりをやり始める。 保 「『むすんでひらいて』も、する？」 B 児「うんうん」とうなずき、手振りをする。 保 「Bちゃんもしたいのね。Aちゃん、Cちゃんもしようね。みんなでしよう。」と話しかけ、『むすんでひらいて』を歌い、手遊びをする。 B 児笑顔で大きく手を動かす。 C 児『飛行機ぶんぶん』の手遊びになると、保育者に抱かれたまま、飛行機のしぐさをし、「ブーン」と言う。 A 児手遊びの途中から両手を振り始める。 豊かな感性と表現等 保 「Aちゃんも上手～！」と声をかけ、他児の名前も呼びながら褒めたり、手を添え一緒に動かしたりする。	知子どもの表情やしぐさから要求を受け止め、言葉にして応じることで、気持ちが表現できるようにする。 知子どもの自発的な活動を大切にしながら、保育者がして見せるなど、一緒に関わって遊ぶことで興味をもったり真似しようとしたりする気持ちを育てていく。
○室内で好きな玩具を使って遊んでいるとき 保 子どもたちの様子を見守りながら、『むすんでひらいて』を歌い始める。 B 児保育者のそばに来て、腕を大きく動かして手ぶりをする。 A 児保育者とB児のそばに来て、にこにこ笑って見ている。 保 「Aちゃんも一緒にしよう」と誘いかける。 A 児うれしそうに両手を振り始める。 保 「AちゃんもBちゃんも上手ね～」とほめ、「もう１回する？」と言う。 B 児「もっかい」と言って、両手を振る。 保 子どもの気持ちに応え『むすんでひらいて』を歌う。 A・B児一緒に両手を振って、笑っている。	体保育中のいろいろな場面で、手遊びをする機会をもち、体を揺らしたり、手を動かしたりする楽しさを伝える。 知子どもの表情から子どもの気持ちを理解し、代弁して言葉にすることで、自分の思いを伝えようとする気持ちにつながるようにする。

【考察】

・保育者との安定した関係の中で手遊びをすることで、楽しさを感じ、保育者の歌声を聞いて、まねて一緒に歌おうとしたり、手振りをしたりすることができるようになってきた。また、給食やおやつの前に機会を捉えて、毎日繰り返したことで、自分から手遊びをしたい気持ちを伝えるようになってきた。（言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

・リズムやメロディに合わせて身体を動かす楽しさは、保育者や友達と一緒に歌ったり手遊びをしたりすることで、育まれていく。また、保育者や友達が歌ったり、手遊びをしたりする姿を見て「自分もやってみたい」という意欲にもつながっていくと感じた。

（言葉による伝え合い、協同性、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・子どもの大好きな歌や手遊びを、発達の時期や季節を考慮しながら、これからも意識的に取り入れていくことで、歌を歌ったり、身体を動かしたりすることが好きな子どもの姿へとつながっていくと感じる。

事例６

１歳児　＜　体　１歳３か月頃～１歳６か月頃　＞

いっしょに　よいしょ！

～　保育者との安定した関係のもと、身の回りのことに興味をもつ　～

＜これまでの経過＞

進級児３名、４月からの新入児 14 名の計 17 名の集団である。月齢差が大きく、新入児も多かったことから、一人ひとりに丁寧に関わることを意識してきたことで、少しずつ好きな遊びを楽しめるようになってきている。また、少しずつ身の回りのことにも興味が出てきており着脱等もやってみようとする姿が見られるようになってきた。新入児Ａ児（１歳３か月）は、ようやく保育所生活にも慣れてきたところで、保育者に機嫌よく身の回りのことをしてもらっている。

＜本活動のねらい＞

・安定した環境の中、衣服の着脱に興味をもち、保育者と一緒にやってみようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・着替えなど身の回りのことを保育者と一緒に楽しみながら行うことで、自分でもやってみようという気持ちがもてるようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○所庭で遊んだ後、保育室に入室した際、保育者がＡ児の紙パンツが濡れていることを確認し、「おしっこ出てるね。パンツ替えようね」と言いながら新しい紙パンツを用意する。 Ａ　児保育者が紙パンツを用意するのをじっと見ている。 保　向き合いながら「脱ぐよ」とズボンと紙パンツを下ろすことを伝える。 保　「ここ持っててね」と保育者の肩に手を置くよう促す。 Ａ　児肩に手をおき、促されて、片足を上げる、ズボンとパンツを脱ぐ。 保　Ａ児に、保育者の膝に敷いたタオルの上に座るよう伝える。また、膝に座ったＡ児に「足を通そうか」と言いながら紙パンツをＡ児の足元に持っていく。 Ａ　児紙パンツの方向に足をあげ、足を通すが、途中で足が引っかかって出てこない。 保　「あれ、出てこないかな」 Ａ　児「でない」 Ａ　児足を動かしているうちに足が通る。 Ａ　児「でたあ」 保　「出たあ！よかったね。じゃあ、こっちの足も通そうか？」と反対の足を通すよう促す。	徳新しい紙パンツに着替えることを伝えてから着脱を始めることで、安心して着替えに向かえるようにする。 知・徳脱ぐための方法を分かりやすく具体的に伝えることで、やってみようという気持ちを引き出す。 体子どもが足を通そうとすることを見守り、自分でやってみようとする気持ちを支える。 徳できたという気持ちを言葉で伝え、共感することにより、満足感や達成

A　児促されて反対の足も通そうとする。 A　児「でた～」 保　「よかったね。じゃあ今度は立ってくれる」 A　児保育者の言葉がけにより、喜んで立ち上がる。 保　「さぁ、一緒によいしょするよ」と言って紙パンツの前の方を持つように促す。 A　児パンツを持つが一旦は手を離す。 保　「あれ？難しかったかな？じゃあ、先生が一緒によいしょするね」と言い、「よいしょ」と紙パンツをあげる。 A　児同じように「よいしょ！」と言う。 保　「できたね。パンツ替えて気持ちいいね」と声をかける。 A　児笑顔で「うん」と言う。 〇その後、保育者は「次はズボンね、じゃあ、もう一回ここ座って」と保育者の膝に座るように促す。 A　児「うん」と言いながらA児は膝の上に座る。同じようにズボンに足を通す行為を保育者と一緒に行うが長ズボンなので、なかなか出てこない。 保　「あんよ出てこないね、よいしょして引っ張って」とズボンを持つように促す。 A　児「よいしょ・・・う～ん、う～ん」 A　児ズボンの足先をひっぱってみるが足が出てこない。 保　「ここ引っ張ってみようか」と言いながらズボンの太もも部分を「よいしょ。よいしょ」と引っ張る。足先が出てきたときにタイミングを合わせて「ばあ！」と言う。 A　児「ばぁ！」と言いながら、うれしそうに保育者の顔を見る。　健康な心と体、自立心等 保　「はいできあがり、よいしょ一緒にできたね」 A　児こちらを向いて笑顔を見せる。	感が味わえるようにする。 体子どもの腰を支えることにより体幹を維持し立ち上がりやすくする。 徳パンツを替えてきれいになったことを伝え、子どもが心地よさを感じられるようにする。 徳諦めずにやってみようという気持ちをもち続けることができるよう、励ましていく。 徳足が出たときに「ばあ」という身近な遊びの表現を添えることで、楽しさを感じられるようにする。 徳できたという達成感や満足感を共有することにより活動への意欲につなげていく。

【考察】

・子どもたちは最初はできなくても、子どもの思いやペースを尊重した保育者の丁寧な関わりや、言葉かけを通して興味や関心をもち、試行錯誤を重ねることで、自分でできた時の達成感や心地よさを味わい、またやってみようという意欲が高まると考えられる。　（健康な心と体、自立心等）

・本活動は衣服の着脱が目的ではあるが、実際に子どもは何回も立ったり座ったりを繰り返したり、足を通そうと動かすことが、体幹を維持するなどの体の発達にもつながることではないかと考える。
（健康な心と体等）

今後に向けて

・衣類の着脱など生活習慣を身に着けていくためには、一人ひとりの子どもの状態を把握し、急がせることにならないよう、その子どもにとって適切な時期に適切な援助をしていくことが大事であると考える。

事例７

１歳児　＜　知　１歳６か月頃～１歳９か月頃　＞

しんぶんし、びりびりたのしいな！

～　身近な素材で感触遊びを楽しむ　～

＜これまでの経過＞

１歳児 18 名。全員が４月からの新入児である。入所時は全員が泣いて保育者を求める姿もあったが、少しずつ新しい環境に慣れ、笑顔も見られるようになってきた。担任の顔も認識できるようになり、一人ひとりに安心感が芽生え始めてきた。

安心できる環境のもと、いろいろな遊びを経験させることで、気持ちを表すことができるだろうと考え、発達を意識しながら感触遊びや運動遊びなど、工夫して提供してきた。今回は新聞紙を用意してみたが、出された新聞紙にとびつく子ども、どうして遊ぶのかわからない子ども等姿は様々であったが、遊んでいくうちに、保育者と関わりをもちながら個々に興味を示す姿が見られた。

＜本活動のねらい＞

・安心できる環境の中で、思いを受け止めてもらいながら遊びを楽しむ。
・保育者と一緒に身近な素材（新聞紙）に触れ、感触を楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・安心できる保育者との関係や落ち着いた環境の中で、自分の思いを出し、受け止めてもらえる心地よさを味わえるようにする。
・素材の出し方を工夫したり、遊び方を知らせたりすることで、いろいろな感触を楽しむなど、遊びへの興味関心につながるようにする。

子どもと保育者の姿　保ー保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○朝のおやつの後、一人ひとりが好きな遊びを楽しんでいる時に、保育者が新聞紙を布に包んで持ってくる。 保　「これ、なんだろう？　(カサカサ)音もするね。」 子　保育者の周りに、興味をもった子どもが数人集まる 保　「あけてみる？」 子　保育者の様子を見ながら、それぞれに、布を引っ張ったり、開いたりしている。 A　児　布を率先して引っ張っている。 保　「なかなかあかないね。」保育者も一緒に引っ張る。 「こっちかな、あっちかな、引っ張ってみよう」 「よいしょ！あいた！みんなあいたよ！」 子　表情が変わり、中を覗き込む。　思考力の芽生え等 保　「新聞紙だね。ほら」と子どもたちに渡す。 A　児　出てきた新聞紙を他の保育者に渡しに行く。「はい！」 受け取った保育者に“ありがとう”と言われ、頭を下げ、	知　見えないものの音を聞かせるなど中身に興味をもたせ、見たい気持ちを引き出せるようにする。 知・徳　子どもの気持ちや行動を言葉にしていくことで、気持ちの共感や言葉の獲得につなげていく。 徳　気持ちを受け止め、要求や欲求を満たしていくことで、満足感を味わえるようにする。

何度も往復して新聞紙を運ぶ。渡すたびに満足気な表情を見せる。 豊かな感性と表現等 〇保育者が低月齢のＢ児に新聞紙を１枚ずつ渡したり、ちぎったりして遊ぶ姿を見せる。 保 「ビリビリっていったね」「Ｂちゃんもちぎってみる？」 Ｂ 児うなずき、同じようにちぎってみようとする。 Ａ 児それを見て「あ！」・・・やって来て声を出す。 保 「Ａちゃんも欲しいんやね。どうぞ」　１枚手渡す。 Ａ 児新聞紙を触りながらも、保育者とＢ児の関わりを気にしている。 保 「Ｂちゃん上手！新聞紙ビリビリって一人でちぎれた」ね！」とＢ児をほめる。 Ａ 児その様子をじっと見ていたが、すぐにＢ児の紙を横から取る。 Ｂ 児びっくりした様子で、Ａ児の顔を見て立ちつくす。 保 「Ｂちゃんびっくりした？はい！もう１枚あげるね」 Ｂ 児すぐに受け取り、また新聞紙をちぎり始める。 保 その様子を見届け、Ａ児と向かい合う。 保 「そうか、Ａちゃんもちぎってみたかったんだね。してみようか？先生見ておくね！」 Ａ 児うなずいて、Ｂ児の隣でちぎり始める。 〇その後、保育者は新聞紙を使った遊びを展開する。 <新聞紙トンネル> Ａ 児保育者が持つフープを引っ張ろうとする。 保 「Ａちゃんも持ちたいの？」 Ａ 児うなずく。 自立心等 保 「よし！先生と一緒に持とうか」 Ａ 児うなずいて、保育者と一緒に持つ。 しばらく一緒に持っていると、満足したようでトンネルをくぐり始める。	知・徳子どもの気持ちを受け止め、伝え方や方法を代弁しながら知らせていく。 知子どもの興味や関心を引き出せるよう十分な量を準備する。 知ちぎる音やちぎった形にも興味がもてるように、言葉に置き換えたり見せたりしていく。 徳気持ちを読み取り、言葉にして代弁していくことで安心感をもたせ自分の気持ちを伝えることの心地よさを味わえるようにする。 徳気持ちを読み取り、言葉にして代弁していくことで安心感や満足感を味わえるようにする。

【考察】

・18 名全員に目を配り、個々の遊ぶ姿や感性、表現を見守り声をかけていく難しさを感じた。同じ素材を使った遊びでも感じる思いや伝えたい気持ちは違っていることが分かり、一人ひとりへの寄り添いや対応の必要性を感じる。受容的、応答的に関わってもらい思いを満たしてもらうことで、安心できる場所、人間関係の基礎づくりにつながっていくのではないかと感じる。

（豊かな感性と表現、自立心、思考力の芽生え等）

・新聞紙を使った遊びは、握ったり、ちぎったり、音を鳴らしたりなどいろいろ工夫することができる。様々な感触を楽しみ、保育者が言葉にして共感することで、物への関心も高まっていくと思われる。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・個々の発達を十分把握し、子どもたちが主体的に遊びに関われるように、保育者側が誘い掛けたり、子どもの様子を見守りながらタイミングを合わせ、臨機応変に関わっていけるよう柔軟に対応していく必要があると考える。

事例８

１歳児　＜　徳　１歳６か月頃～１歳９か月頃　＞

エプロンどうぞ

～　保育者との関わりを通して友達に関心をもつ　～

＜これまでの経過＞

１歳児 12 名（新入児６名・進級児６名）のクラスである。進級児６名は、保育者のすることに興味があり、保育者が椅子を運ぼうとすると手伝おうとしたり、机の片付け場所を「ここ！」と示したりする姿が見られていた。

新入児Ａ児は１歳７か月、入所から１か月近く経っても保育所生活に慣れることが難しく、自分の気持ちを出せなかったが、慣れ始めると、友達のしていることに興味をもち始め、じっと見るようになってきた。そして、自分もしてみたいと思うようになってきたようで、他児がエプロンを配っている時には真似をして、「○○ちゃんの～」と、言葉で言えるようになってきた。

＜本活動のねらい＞

・思いを受け止めてもらうことで、安心して自分の気持ちを出そうとする。
・自分の思いや要求を、表情やしぐさで表現し、伝えようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・子どもの不安や要求に気が付き、十分に受け止め応えていくことで、安心して自分の気持ちを出せるようにしていく。
・思いを代弁したり共感したりするなど応答的に関わることで、気持ちを受け止めていけるようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者　子－子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○子どもたちは、おやつを食べる前に手を洗い椅子に座る。 保育者がエプロンのかごを持ってくると、Ａ児が保育者をじっと見て立ち上がろうとする。 保　Ａ児の気持ちを察知し、「Ａちゃん、エプロン配ってくれる？」と言うと、Ａ児 は嬉しそうに立ち上がり、エプロンを取りに来る。　自立心等 保　1 枚 1 枚Ａ児に手渡しながら「これ誰のかな？」と言うと、 Ａ　児「○○ちゃんの…」と言いながら、マジックテープを外して友達に渡したり、前に置いたりする。 保　Ａ児が分からない時は保育者がみんなに「このエプロンは誰のかな？」と聞くと Ｂ　児「Ｃちゃんの…！」 保　「Ｃちゃんのやね。　Ｃちゃんは、どこかな？　渡して	徳子どもの表情やしぐさ等の表現を受け止め、保育者が言葉にして共感することで、自分の思いを受け止めてもらった喜びが味わえるようにする。 徳自分でしたいという気持ちを大切にすることで、やってみようという気持ちを育てていく。 知気持ちを表現できるよう思いを代弁したり、共感したりするなど、応答的に関わっていく。

あげて」とB児に渡す B　児 C児が分からないのか、C児のエプロンを持ったまま、どうしたらいいのかしばらく考えている。 A　児 困っているB児に「あっちー！いたー！」とC児の方を指さしする。 言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等 保　「Aちゃんよく分かったね！」「Bちゃん渡して来てくれる？」 B　児 笑顔でC児にエプロンを渡しにいく。 保　「Cちゃんよかったね」「Bちゃんありがとう」 〇保育者がまた次のエプロンを取り「これは誰のかな？」と聞くと、A児 は笑顔ですぐに保育者のところに、エプロンを取りに来る。 子　自分のエプロンを友達からもらい、嬉しそうにしている。 保　「Aちゃん、上手に出来たね、ありがとう」と伝える。 A　児 最後まで配り終え、自分のエプロンをつけると満足そうな表情で座る。	徳 子どもの自発的な行動を大切にし、楽しいという気持ちを共感する。 徳 安心できる人と一緒にすることで、やってみたいという気持ちがもてるようにする。 徳 言葉にして伝えることで、できたという満足感を味わえるようにするとともに、またやりたいという気持ちにつなげていく。

【考察】

・保育者が給食やおやつなど毎日の繰り返しの中でエプロンを配ることが、子どもの興味につながり、子どもの配ってみたいという気持ちを引き出せた。また、その都度子どもの思いに共感したり、代弁したりすることで、さらに「できた」という満足感を味わえることにつながった。楽しんで配るうちに自分の存在もアピールできるようになってきている。

（自立心、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

・保育者に気持ちを受け止めてもらうことで、安心して自分が出せるようになり、自分の思いを伝えたり自分から何かをしたりしようとするようになってきた。さらにこの手伝いを通して、他のことにも楽しんで参加し、誘われなくても自分から進んでしようとするなど、子どもの自信につながり、安心して過ごしている姿が見られるようになってきた。

（自立心、言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・安心して自分を出せる環境の中、一緒に関わって遊んでいくことで、保育者との信頼関係も深くなっていき、いろいろな遊びへの意欲も引き出されると感じる。保育者との関係をもとに、今後は友達にも興味関心をもたせ、関わりを楽しむことができるように意識していきたい。

事例９

１歳児　＜　知　徳　１歳９か月頃～２歳頃　＞

いやいや！あそびたい！！

～　受け止めてもらえた心地よさを感じる　～

＜これまでの経過＞

１歳児 12 名（進級児３名、４月からの新入児９名）のクラスで、担任は２名である。子どもたちは、保育者との関係も深まるなかで、だんだん自分の思いを出せるようになってきた。園庭では手押し車を押して探索したり、砂遊びを楽しんだりしている。また、異年齢児との関わりを喜ぶ姿が見られるようになってきた。

保育者は表情や言葉、しぐさから、子どもたちの要求や欲求をしっかり読み取り、受け止めるように心がけている。（A児１歳９か月　B児１歳 10 か月）

＜本活動のねらい＞

・自分の思いや要求を安心して言葉や表情で表し、受け止めてもらえた心地よさを感じる。
・友達に関心をもち、一緒に過ごす楽しさを感じる。

＜本活動での教育的意図＞

・指さしや身振り、片言で伝えようとしていることを受け止めてもらい、心地よさを感じ、伝えるということや、言葉を使う楽しさを感じられるようにする。
・友達に親しみがもてるような言葉がけや仲立ちをすることで、一緒に過ごす楽しさが感じられるようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者　子－子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○園庭で好きな遊びを楽しむ。 A　児 砂場で４歳児にカップに砂を入れてもらって遊んでいる。 B　児 手押し車を押し、園庭の探索をしている。 保　まもなく給食が運ばれてくるので、砂場で遊んでいる子どもたちに、保育室に戻る時間であることを伝える。 それを聞いた子どもたちがテラスで靴を脱ぎ始める。 保　園庭を散策しているB児のそばに行き、 「もうすぐ　ごはんだよ」 「あっちで　友達が待ってるよ」と声をかける。 B　児 テラスで友達が待っているのに気が付くと「行く」と言って、手押し車を置き、友達の所に歩いて行く。 A　児 砂場でスコップとコップを持ち、４歳児に砂のプリンをたくさん作ってもらっている。 保　「プリンいっぱいできたね」と一緒に食べる真似をする。	徳 一人ひとりが自分の好きな遊びを見つけ、じっくり楽しめる環境を整えることで、やってみたい気持ちが高まるようにする。 知・体 安全に配慮して、探索活動や遊びなどが十分楽しめるように環境を整える。 徳 友達のことを意識したり、気にかけたりできるように、言葉をかける。

「あ～おいしかった。ごちそうさまでした。」 「さあて、もうすぐごはんがくるから、お部屋に帰ろうか？」と声をかける。 A　児「いや！いやいや！」と言って泣く。 言葉による伝え合い等 保　「Aちゃんまだ遊びたかったの？」 A　児「（あそび）たい！」と言ってコップを持って保育者を見る。 子　部屋に戻り始める。 保　「遊びたいね」「でも友達は部屋に行ったよ。給食食べるのかな？」「Aちゃんはどうする？」 A　児保育者の話をじっと聞いていたが、テラスを見つめ、友達がいないのが分かると、「行く」とつぶやいた。そして一緒に遊んでいた 4 歳児に「はい！」とスコップとコップを渡し、急いでテラスに駆けて行った。 道徳性・規範意識の芽生え等 保　A児を追いかけながら、「一緒に帰ろうか？」と声をかける。 A　児友達が見えない事に少し戸惑っているようで「どこ？」「いない」と探している。 保　「大丈夫！みんなお部屋で待ってくれてるよ。一緒に行こう！」 A　児「うん」と嬉しそうに追いかけ始める。部屋に戻りかけるとすぐに友達の姿が見える。 保　「よかったね。お友達が見えたね」 A　児「おーい」と友達に声をかける。 子　A児の声が聞こえると友達も「おーい」と返事をして笑っている。	知指さしや身振り・片言で言おうとしていることを受け止め、言葉にして返すことで、子どもが気持ちを伝える喜びや言葉を使う楽しさを感じられるようにする。 徳子どものやりたいという気持ちを受け止めながら、子どもの気持ちに寄り添い、気持ちを引き出せるようにする。 徳友達の様子を伝える事で、友達のことを気にかけたり、意識したりできるようにする。

【考察】

・新入児については、特に最初は慣れない保育園生活で落ち着かない状況である。そこで保育者ができるだけ一人ひとりの生活リズムやペースを把握し、個々に応じた関わり方を心がけることで、子どもとの関係が深まってきた。安心した環境の中で、自分の思いを出し、受け止めてもらった経験は、自己肯定感につながり、また自分の気持ちを表出しようとする意欲につながっていると考えられる。。

（言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

・この時期になると、周りの友達にも関心をもち、同じように楽しもうとするので、友達のことや今の周りの状況を伝えていくことで、子どもなりの状況判断ができ、気持ちの切り替えができていくと感じた。

（道徳性・規範意識の芽生え等）

今後に向けて

・子どもが気持ちを表出したときに、保育者はできるだけ子どもの思いを受け止めることで、子どもは満足感を味わい、いずれは我慢することや相手の気持ちに気付くことなどにつながっていくだろうと考える。

事例１０

１歳児　＜　知　１歳９か月頃～２歳頃　＞

カレーライスおいしい！

～　保育者が仲立ちとなり簡単なやりとりを楽しむ　～

＜これまでの経過＞

・１歳児６人のクラスで担任は１名である。これまで自分の要求や気持ちをたくさん出して欲しいと思い、子どものしぐさや表情をしっかり把握し、代弁したり、共感したりするなど受け止めることを大切にしてきた。関係ができてくると子どもたちが思いを出すようになったので、できるだけ１対１で気持ちをしっかりと受け止めるようにするとともに、言葉での伝え方を知らせてきた。

　また、自分の好きな遊びをしながらも、他の子どもの遊んでいる様子が気になり、少し遊んでは次の遊びをしたり、部屋を歩きまわったりという姿が見られ、同じように他の子どもも落ち着きがなくなることがあったので、遊びをじっくり楽しめるように、保育者と１対１で向かい合い、集中して遊べるような環境を整えながら、一緒に遊んで満足感を得られるようにしてきた。

＜本活動のねらい＞

・保育者と安定した関係の中で好きな遊びを楽しむ。
・遊びの中で簡単なやりとりをしたり、表情やしぐさで自分の思いを伝えたりしようとする。

＜本活動での教育的意図＞

・好きな遊びを、安心できる人と安定した環境で楽しむことで、保育者と楽しい気持ちを共感し、遊びたいという気持ちが高まるようにする。
・コーナーを作り、子どもが興味のある玩具を用意することで、子どもがしたい遊びを選択し、落ち着いて楽しめるようにするとともに、子どもの言葉や表現を丁寧に受け止めることで自分の気持ちを伝えようとする気持ちを育む。

子どもと保育者の姿　保ー保育者　子ー子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○保育者の周りに集まって絵本『ぐるぐるカレー』を見る。 A児 は絵本を見たくない様子である。 保「どうする？一緒に絵本見る？」 A 児「いや」 B 児「ここあいてるで」 保「あいてるって言ってくれてるけどどうする？」 A 児「いや」 保「そっか。じゃあ読むからそこで聞いててね」と言葉をかけながら絵本を読み進める。最後はカレーライスのページになると 保「どうする？食べてみる？熱いかもしれないから気を付けてね」と言いながら、子どもたちにページを見せると、順に子どもたちが食べる真似をする B 児「おいしい」 保「おいしいね」	徳子どもの思いを受け止めることで、安心して思いを出せるようにする。 知絵本のカレーライスを食べる真似をするなど、イメージしやすいようにし、つもり遊びを楽しめるようにする。

C 児「あつくない」 保「あつくない？よかった」 B 児「スプーンで」 保「スプーンで食べるの？どうぞ」 保 子どもの言葉に対応しながら、見立てつもり遊びを進める。A児はその様子をじっと見ている。 保「Aちゃんもカレーライスいる？」 A 児「いらん」 保「Aちゃんいらないんだって。どうしようか。Aちゃんにカレーライス持っていってあげる？」 子「はい！」子どもたち数人でA児に持っていく。 A 児 持ってきた子どもたちの方をチラッと見たが、また後ろに向きなおす。 A 児「いらん」 保「やっぱりいらないんだって。じゃあ先生がもらっとくわ」 カレーライスを食べる真似をする。 「Aちゃんのカレーライス、ここに置いておくね」 A 児 少し間をおいてから、保育者が置いておいたつもりのカレーライスを食べる真似をする。 保「よかった。おいしいね」とA児に語りかける。 「先生まだお腹空いているから、今度はみんなでおいしいごはんいっぱい作ろうか」 〇子どもたちはままごと遊びを始める。 保「何作る？先生おなかすいたな」と全体に語りかける。 B 児「ハンバーグ作る」 C 児「カレー作る」 自立心、言葉による伝え合い等 A 児 ままごとコーナーのついたてに隠れながら、ジュースを入れたり、ご飯を作ったりしている。 子「いただきます」みんなでごはんを食べる。	徳 子どもたちの気持ちや言葉を引き出すために、一度は「どうしようか」と投げかけることで友達への関心をもたせる。 徳 A児の気持ちを受け止め、伝えるとともに他の子どもたちの気持ちも受け止める。 知 おいしかった気持ちを受け止め次の遊びをやってみようという意欲につながるように誘いかける。 知 子どもからの発言を引き出せるよう応答的に関わり、自分の思いを伝えられるようにする。

【考察】

・これまで丁寧な関わりを積み重ねたことにより、信頼できる保育者のもと、好きな遊びを楽しむ姿が見られたが、ままごと遊び以外の玩具の位置が遠く、カーテンがかかっているなど、子どもに見えにくかった。子どもが自分で好きな遊び見つけ、満足いくまで十分楽しめるように環境を整えていく必要があると考える。 （健康な心と体、自立心等）

・月齢が高いため、自分の気持ちを言葉で表現することができる子どもたちだが、まだまだ受け止めて欲しいという気持ちが多く見られる。繰り返し共感し、自分から伝えようとする気持ちを育むようにする。 （言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・保育者との楽しい遊びや触れ合いが、子どもが活発に遊ぶきっかけとなり、作ってみたいという気持ちの芽生え、ままごと遊びにつながっていくと思われる。また、友達に少しずつ興味をもち始めているので、今後は保育者との関係を基盤に、子ども同士の関係を広げていけるような働きかけを意識していく。

事例 11

１歳児　＜　体　１歳９か月頃～２歳頃　＞

からだをうごかすってたのしいね

～　保育者と一緒に身体を動かして遊ぶ　～

＜これまでの経過＞

動物が大好きな子どもたちは、絵本に動物が出てくると喜び、保育者が動物の歌を歌ったり動物の動きをしたりすると、保育者と同じように身体を動かして楽しんでいる。また手、指を使う遊びや、布を使って身体全体を動かし、バランス感覚を養うような遊びも楽しんでいる。

所庭に出ると、年長児が靴を履かせてくれ、２人乗りの三輪車の後ろに乗せて遊んでくれるなど、異年齢の友だちとの関わりも少しずつ増えてきた。運動会では、２歳児が取り組んだ「電車ごっこ」をまねて、年長児が１歳児を乗せて遊んでくれたことから、ますます関わりが深まってきた。

＜本活動のねらい＞

・保育者と一緒に身体を動かすことを楽しむ。
・保育者や友達(異年齢児も含む)と一緒に触れ合い、関わって遊ぶことを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・音楽に合わせたり、歩いたり、跳んだり、バランスを取ったりなど、いろいろな動きを経験することで、保育者や友達と一緒に身体を動かして遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
・安心できる環境のもと、好きな保育者や友達、異年齢児と関われるような機会を見つけ、楽しめるようにする。

子どもと保育者の姿　保―保育者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○朝のおやつ後、絵本を読み、好きな遊びを楽しんでいる。 保　「あ！音楽聞こえてきたよ。体操しようか？」 子　「うん」「する」 子　見ていた本や玩具を片付け始める子もいれば、周りの様子を気にして、あまり動かず、保育者の顔をじっと見ている子もいる。	体一緒に身体を動かす事で、子どもがリラックスできるようにし、身体を動かす楽しさを味わえるようにする。
保　「今度はゴリラさんになるよ」「もっと高く跳ぶよ」と動き「○○ちゃん上手」などと声をかける。 子　次第に表情もほぐれ、保育者の方を見て嬉しそうにしながら、音楽に合わせ体操を始める。	徳落ち着いて過ごせるように、一人ひとり丁寧に関わるようにする。
保　「楽しかったね。」 子　「ゴリラした」「もっとしたい」 保　「ほんと、おもしろかったね、また今度しようね」「さぁ次は、お外に行ってゆりぐみさん（５歳児）と一緒に遊ぼうね。レッツゴー！」 子　「ゴー」と、一緒に手を上げている。 保　先頭となり、歌を歌いながら外に出る。 子　自分で靴を取りに行き、一人で履いたり、履かせてもらったりする。	徳年長児と一緒に遊ぶことに期待を持つことができるよう先に知らせておく。
５歳児電車の先頭に乗って、誘いに来る。 保　「ゆりぐみさんが誘いに来てくれたよ、一緒に電車に乗ってみようか？」	体・徳遊びに興味をもち、安心感をもって遊べるように、誘いかける。

子 「いくー」「のる」それぞれ好きな電車を選び乗り込み、出発して行く。 保 「いってらっしゃい」と見送る。 子 5歳児のバスに乗り込むと、うれしそうに「ばいばい～」と手を振っている。 〇保育者は所庭のポイントになる木や柱に、動物（ウサギ、キリン、ゾウ）の絵を貼り、駅に見立てる。 保 バスに乗っていない A 児に「電車に乗ってみる？あっちにウサギ駅あるよ。行ってみようか？」と声をかけてみる。 A 児「う・・ん」と言いながら、保育者の方を見て笑っているので、保育者がもう一度誘いかけると一緒に電車に乗って、ウサギ駅に行く。 保 「ウサギ駅ついたね。ウサギさんいるかな？」	徳子どもの気持ちを受け止め、誘いかけることで、やってみようという気持ちがもてるようにする。
○他の子どもたちと 5 歳児がウサギ駅の看板を見ている。 保 「ウサギさんみたいに、ピョンピョン跳んでみる？」 A 児他児と一緒に、保育者の真似をして跳んでいる。 保 「ピョンピョンおもしろいね」 A 児「うん」と、うれしそうに笑う。	体一緒に身体を動かすことで、楽しい気持ちを共有できるようにする。
○タイミングよく、5歳児の電車が誘いに来る。 5歳児「キリン駅ゆきでーす」 保 「A ちゃん乗ってみる？」 A 児「うん」うれしそうに電車に乗って、手を振っていく。 保 「ばいばい」 〇5歳児と A 児はキリン駅で降り、他児と一緒にキリンの歌を歌いながら一緒に歩いている。 保 「みんな楽しかったね～」 「いっぱい遊んだから、そろそろお部屋に戻って、今度は動物の絵本みよう～！」	徳タイミングよく子どもの気持ちを受け止め誘うことで、「できた」という嬉しさを味わえるようにする。

【考察】

・寒い時期にしっかりと身体を動かして、遊ぶことができるよう大好きな動物の動きをまねる遊びを取り入れたが、広い所庭では子どもたちが表現遊びを楽しむようなイメージがもてず、場所設定や空間、さらに環境構成の工夫が必要であった。また、保育者や友達が楽しそうに遊んでいると、それを真似したくなり、それが身体を動かして遊ぶ楽しい活動につながった。

（健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等）

・多くの子どもたちが 5 歳児と一緒に遊びを楽しんでいたが、中には嫌がり一人で遊ぼうとする姿があった。まだまだ 1 歳児という年齢では、保育者と子どもが、まず信頼関係を深め、安定した関係を築いていくことが大事で、それを基盤に、友達や異年齢児にも関係を広げていけるようにしていきたい。

（健康な心と体、社会生活との関わり等）

今後に向けて

・この時期になると、子どもたちは生活の流れが分かり、自分でやってみよう、またしようとする気持ちが芽生えてくるので、そのタイミングを見逃さず、子どもが主体的に動けるような工夫や、できた時に具体的・肯定的な言葉をかけることによって、いろいろなことに興味、関心を広げていく機会が増えると思われる。

事例１２

２歳児　＜　徳　Ⅰ期・５月　　人と関わる力　＞

せんせい、またしようなぁ～

～　安心できる保育者とふれあいあそびを楽しむ　～

＜これまでの経過＞

進級児 14 名　新入児２名　計 16 名のクラス。自分の思いをいろいろな方法ではっきりと表現する子どもが多い。興味や集中する時間に個人差はあるが、いろいろな活動に興味をもち、クラス全体で一緒に楽しむ姿も多く見られる。友達に興味があり関わりを喜ぶ姿があるが、思いが伝わらずトラブルになり緊張した表情を見せ、集団で活動する際は、じっとしている姿も見られる。

まずは、一人ひとりが安心して遊べるように、子どもの姿に応じて言葉をかけながら、保育者との信頼関係を築いていけるようにした。また、子どもたちが興味をもち楽しめるような遊びを積極的に取り入れていき、保育者も一緒に遊びながら友達と関わる楽しさを感じられるような機会をつくるようにしていた。

＜本活動のねらい＞

・保育者のそばで安心して過ごし、好きな遊びを楽しむ。

＜本活動での保育者の教育的意図＞

・好きな遊びの中で、友達への関心をもてるようにする。
・安心できる保育者といることで、興味をもって遊べるようにする。

子どもと保育者の姿　保－保育者　子－子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○みんなで集まり座って絵本を見た後 保　「みんなでポットンしようか？」 子　「うん！するする！」 ・♪手をつなごう　みんなで手をつなごう～と口ずさむと、歌に合わせて手をつなぎ始める子どもや、その様子をじっと見ている子どももいる。 保　「じゃあ～始めるよ」 保・子　♪なべのなかのくりが～ 保　新入のＡ児が笑顔で遊んでいる様子を見守りながら遊ぶ。 保　「楽しかったね」 子　「うん。もう１回しよう」　自立心、社会生活との関わり等 保　「そうだね。もう１回しようか。Ａちゃん、一緒にしよう」 Ａ　児　黙って立っている	知　好きな遊びを取り入れることで、活動への意欲や期待感がもてるようにする。 徳　保育者が口ずさむことで、子どもたちも一緒に動き出したり自分もやってみようとしたりする楽しい気持ちを引き出す。 徳　遊びに直接参加しなくても、自分から参加する気持ちになるように遊びを見ている子ども一人ひとりの表情や動きを見守る。

保　「一緒にしよう」と言いながらA児のそばに行き、笑顔で手を差し出す。 A　児表情は硬いが保育者と手をつないで、輪の中に入る。 保　「それじゃ始めるよ」 保・子♪なべのなかのくりが～ 一緒に歌ったり、笑顔で体を揺らしたりする子どもや「ポットン」の声かけに合わせて、笑顔でジャンプして座っていく。　自立心、協同性、社会生活との関わり等	徳子どもの思いを受け止め、無理なく遊びに参加できるようにすることで、保育者との信頼関係を積み上げる。
保・子「♪Aちゃんもポットン」 A　児笑顔で座る。 保　「楽しかったね。またみんなでしようね」 子　「楽しかった」 子　「先生、またしようなぁ～」 協同性、豊かな感性と表現等 保　A児の顔を見て、微笑みかける。	徳保育者や友達が誘いかけられたことを受け入れ、活動に参加することで、友達との関わりが深まっていくように子どもの姿を見守る。 徳友達の姿に目を向け親しみを感じ、友達と関わることが楽しいと思えるように、子どもと視線を合わせ声をかける。

【考察】

・友達の様子を見たり遊びをまねたりして、友達に興味を示す子どもが多いので、友達と触れ合う遊びを意識して取り入れ繰り返し遊ぶことで、友達と遊びたいという気持ちが高まってきた。

（社会生活との関わり、豊かな感性と表現等）

・新入児と進級児では生活全般において経験の差がある。「おもしろそうだな」「遊びたいな」と思える状況をつくることや、無理に遊びに誘うのではなく、「見て楽しむ」ことから認めていくことが大切だと思う。

（自立心、協同性、社会生活との関わり等）

今後に向けて

・わらべうたなどのように、年齢に合わせて遊べる歌を保育者が取り入れながら、友達と関わることの楽しさを育んでいきたい。

事例１３

２歳児　＜　体　Ⅰ期・５月　　運動　＞

おもしろかったなぁ

～　保育者や友達と一緒に身体を動かして遊ぶ　～

＜これまでの経過＞

進級児 10 名　他園からの新入児２名　計 12 名のクラス。進級児はこれまでの経験もあり、探索活動が盛んで、自分で好きな遊びを見つけて楽しむ姿が見られる。新入児は環境が変わったこともあり、保育者がそばにいると安心して生活するようになった。また、保育者と数人の子どもで追いかけっこを楽しんだり、動物になって身体を動かしたり、保育者と一緒にみんなで体操をしたりすることを楽しむ姿も見られるようになっている。

＜本活動のねらい＞

・保育者や友達と一緒に身体を動かして遊ぶことを楽しむ。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・興味のある活動を通して、「楽しい」「一緒にやってみたい」という気持ちを育む。

子どもと保育者の姿　保－保育者　子－子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○ほとんどの子どもが朝のおやつを食べ終わった頃 保　１「お外に行く前に体操しようか」 子　「する、するー」と言いながら保育者に近づいてくる。 Ａ　児「やったー」と言いながら両足ジャンプをする。 Ｂ　児「ウサギさんのがいい」　健康な心と体等 保　１「そうか、動物体操したいんだね」 Ｄ　児（新入児）保２に側で見守られながら、おやつを食べている。 保　１「Ｄちゃんもおやつが終わったら体操しよう！待ってるね」 Ｄ　児保２の顔を見る。　社会生活との関わり等 保　２「Ｄちゃんの好きなウサギだって」 Ｄ　児にっこり微笑む。 保　２「食べ終わったら、みんなと体操しようか？」 Ｄ　児「うん」と言いながらうなずき、残りを食べ始める。	体行動を具体的に知らせることで、生活に見通しをもてるようにする。 体戸外に出る前に体を動かし温めることでけがのリスクを軽減する。 知・徳子どもなりの表現をくみ取ることで、思いが伝わった満足感を味わうことができるようにする。 徳個々のペースを認めながらも友達がしていることに気付かせることでクラスの一員であることを感じるようにする。 徳・体子どもの興味のあることから、やりたい気持ちを引き出すようにする。
○路面電車の遊びの中で 保　１「Ｄちゃんが来るまで、路面電車に乗ってお出かけしよう」 子　保育者の足に座ろうとするが、全員は座れず押し合いになる。 保　１「この路面電車は公園に行きます。でもちょっと満員です。動物園に行く友達は、次の路面電車をお待ちくださ	徳保育者と触れ合って遊ぶことの心地よさを感じながら「待つ」ことで、友達に関心をもてるようにする。 徳子どもたちと身近な乗り物を題材に遊ぶことで、順番があることが分かるようにする。

い」 B 児「動物園、行く」 保 1「動物園に行く人は、この椅子でお待ちください」と言いながら長椅子を置く。 B 児「はーい」と返事をしながら長椅子に座る。 子 保育者の足に座ったり、保育者と同じように足を投げ出し座ったり、長椅子に座ったりする。 道徳性・規範意識の芽生え等	知・体実体験からイメージできるようにすることで、次の行動に見通しをもてるようにする。
保 1「路面電車、出発しまーす ♪路面電車に～ストトーントン！　公園駅です」 A 児「ありがとう」 子 「おもしろかったなぁ」と言いながら床に寝そべって顔を見合わせている子どももいる。 協同性等 保 1「おもしろかったね。また次にしようね。次の路面電車は動物園行きです。お乗りの方はいらっしゃいますか？」 B 児「いまーす」 子 長椅子から保育者の足に座りかえる。 保 2「動物園行き路面電車、出発しまーす。 ♪路面電車に～ストトーントン！　動物園駅です」 A 児長椅子に座って一緒に身体を揺らしながら歌う。	徳子どもの表情や言葉に共感することで、自分の気持ちが伝わった喜びを感じるようにする。また、順番があることを知ることができるように、待つことや待ったら自分の順番が来ることを経験する中で、保育者と共感し、できたことを認めていく。 知友達と少しでも遊びのイメージを共有できるようにすることで、遊びたくなるような気持ちを育む。 徳子どもが期待しながら遊びに参加できるようにすることで、友達への興味や関心、一緒に遊びたい気持ちを育むようにする。
○そこへ保２とD児が急ぎ足で近づいてくる。 保 2「Dちゃんも特急電車で到着！」 D 児笑っている。 保 1「みんな、Dちゃんも来たよ。みんなで動物に変身するよ」 ・♪動物体操の音楽が聞こえる。 保 1「ピョンピョンってジャンプだよ」 A 児「見て見てー」 保 1「Aちゃんウサギだね。両方の足でジャンプしてる！」 D 児ひざを屈伸させながら笑顔を見せる。 保 1「Dちゃんウサギも楽しそうに跳ねてるね」 D 児さらに激しく体を上下させる。 子 自分なりに体を動かすことを喜び、時々、子ども同士で顔を見合わせている。 協同性等	体・徳子どもの姿を捉え言葉に置き換えることで、もっと体を動かしたいという気持ちになるようにする。

【考察】

・体（運動）の観点から見ると、A児、B児は自分から友達と遊ぶことが楽しいと感じている様子が見られる。D児は保育者との関係が安定してくると同時に、少しずつ友達のことや友達がしている遊びに興味や関心がもてるようになってきている。このように一人ひとりの姿をよく観察し、理解しておくことが大切であることに気付いた。個の発達段階を理解をしながら、集団の中で育まれることが多い時期であることも踏まえて、全体の見通しをもった計画性と、その時々の子どもの姿に応じた関わりが求められると分かった。子どもが活動する中で『楽しい』『一緒にやってみたい』という意欲を育む基盤となるのは、まず保育者との安定した関係が必要であることが明らかになった。

（健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え、協同性、社会生活との関わり等）

今後に向けて

・歩く、走る、跳ぶなどの運動機能が発達する時期でもあるので、保育者と一緒に生活の再現や、模倣遊びを取り入れながらごっこ遊びを展開し、子どもがイメージをもって体を動かす遊びを経験できるようにしていきたい。

事例１４

２歳児　＜　知　Ⅱ期・７月　　創造　＞

ペタペタポンポンたのしいなぁ

～　保育者や友達と一緒に感触遊びを楽しむ　～

＜これまでの経過＞

進級児６名　新入児６名　計 12 名のクラスで４月からスタートした。当初は保育者との１対１の関わりの時間がもてるように、わらべうた遊びやふれあい遊びを楽しめるようにした。また、いろいろな経験や活動を通して人と関わる力や言葉が育まれるように、様々な素材を使った感触遊びや、つくる活動を意識的に取り入れてきた。その中で、子どもが楽しいと感じたり、気付いたりしたことを言葉や体で表現しようとする姿を捉え、丁寧に関わってきた。その結果、どろんこ遊び・色水遊び・水遊び・プール遊びなどいろいろな遊びに積極的に参加するようになってきている。

＜本活動のねらい＞

・保育者や友達と一緒に興味のある遊びを楽しむ。
・絵の具を使って、スタンピングや感触遊びを十分に楽しむ。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・保育者が仲立ちとなり、友達の様子を伝えたり誘ったりすることで、保育者や友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
・言葉や身体で思いや気持ちを伝えることが楽しいと感じられるように、保育者が共感したり、応答したりしながら、表現したい気持ちを育む。

子どもと保育者の姿　保－保育者 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○いろいろな素材の紙（模造紙・画用紙・障子紙）を準備し、自分の好きな場所で、スポンジやオクラ、手を使って紙にスタンピングし、ぬたくりをする。 A　児両手に絵の具を付け、紙の上をポンポンとたたき、満足そうな表情で「かけたー」と知らせる。 保　「かけたね」 A　児「ペタペター」　言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等 保　「ペタペタしてる？」 A　児「うん。ほら・・見て」と両手を見せる。 保　「ほんとだ。Aちゃんのペタペタいっぱいできたね」 「今度は違う絵の具使ってみる？」 A　児「うん！」と言いながら、絵の具を選びに行くと、使いたかった水色をＢ児が先に使っており、どうしたらいいものかと困っている。 保　「Aちゃんは水色を使いたかったのね。どうする？Bちゃんに言ってみる？それともこっちの青色使う？」 A　児「うーん・・・水色がいい」 保　「そうだね。水色きれいな色だもんね。じゃあBちゃんに言ってみようか」 A　児「水色貸して」 B　児「あかん」　言葉による伝え合い、自立心等 A　児「・・・・」困った様子で保育者の顔を見る。	 徳子どもが思ったり、感じたりすることに共感することで、伝える喜びを感じられるようにする。 知他の色もあることを知らせ、いくつかの中から自分で選択できるように提示することで、自分の気持ちを表現できるようにする。 徳A児の気持ちを受け止め、代弁する

保 「じゃあBちゃん　終わったら貸してね」 B 児「うん」 保 「Aちゃんはちょっと待てるかな？その間にスポンジやオクラを使ってみる？」 A 児「うん」と言ってオクラのスタンピングを始める。 B 児A児の様子を気にしながらしばらく水色を使っていた。 B 児「もういいわ。ぼくもオクラするー」と水色の絵の具を持ってきた。 道徳性・規範意識の芽生え、自立心等 保 「Bちゃん、ありがとう。Aちゃん、Bちゃんが水色を持ってきてくれたよ。使う？」 A 児「うん」 A･B 児並んでオクラのスタンピングを楽しみ始めた。協同性等 C 児スポンジに絵の具を付けて、模造紙に何度もスポンジでスタンピングするたびにジャンプをしている。 保 「いっぱいできたねぇ。すごいねぇ。楽しいねぇ」 C 児「楽しい！もっとしたい」 保 「いいよ～いっぱいしていいよ！」 C 児模造紙一面にスタンピングや、ぬたくりを楽しんだ後「海みたい！」 豊かな感性と表現性等 保 「ほんとだね。海に見えるね」 D 児「海知ってる」 C 児「魚いる」 保 「そうだね、魚だね。こんなに大きな海だから魚がいっぱいいるかもね。魚をかいてみる？」 C 児笑顔で、魚を表現する絵の具や用具を探しに行った。 自立心、豊かな感性と表現等	ことで、お互いの思いを叶えるためにどうするか、具体的に知らせていく。 知遊びの展開に見通しをもち、素材や紙の量を十分に用意することで、やってみようとする意欲につながるようにする 徳保育者が仲立ちとなり、友達の様子や気持ちを伝えることで、友達のしていることに興味がもてるようにする。 知もっとやりたい気持ちを受け止めスタンプできるところや用具を示す。 知子どもの発想や驚きを見逃さず受け止め、共感したり代弁したりすることで、表現したいという意欲を育めるようにする。

【考察】

・いろいろな素材を用意し環境を整える事で、子どもたちの意欲が高まり、子ども一人ひとりの遊びを楽しむことができた。また、友達に対して興味をもち始めた時期なので、保育者が仲立ちとなり、互いの気持ちを伝えるなど一緒に遊ぶことが楽しいと感じられるようにすることが大切だと考え、働きかけた。 （自立心、思考力の芽生え、協同性等）

・「やりたい」と思ったことを保育者に伝えたら、今はできなくても待てばできるという経験が信頼関係につながり、育ちの基盤になると考える。
（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等）

・様々な素材を使って絵の具でのスタンピングを十分に楽しめるようにしたことで、気付きや発見、楽しいと感じる気持ち、もっとやってみたいという意欲が出て、言葉や身体・表情を通して、表現する姿が見られた。それに対して、保育者が気持ちに寄り添うことで、一層楽しめていたと思われる。
（豊かな感性と表現、言葉による伝えあい等）

今後に向けて

・友達との関係がますます深まっていく中で、保育者の仲立ちや見守りが必要となっていく。それぞれの言葉の獲得や表現方法などが様々であるため、保育者は子どもの状況を把握しながら、子どもが思いを伝えたり、表現したりすることが楽しいと感じられるように、タイミングよく働きかけることを意識していく必要がある。また、興味のあることをそれぞれのペースで十分に楽しむことが、いろいろなイメージをもったり経験したことにつながったりする。この表現活動が次の遊びの土台になっていくようにしていきたい。

事例１５

２歳児　＜　体　Ⅱ期・７月　　食育　＞

はやくたべたいなぁ

～　食べることに興味や関心をもつ　～

＜これまでの経過＞

身の回りの様々なことに興味を示す６名のクラス。４月末から、『しーっ！ひみつのさくせん』の絵本（いろいろな作戦を立てて鳥を捕まえようとする内容）を繰り返し読んでいると、絵本の時だけでなく、日々の遊びの中でも、場面に合わせて「作戦」という言葉を使って遊ぶ姿が見られるようになっている。そこで、いろいろな活動を「○○作戦」と名前を付けて、子ども自身が「楽しかった。また遊びたい」と思えるように保育者も一緒に楽しんでいる。また、食べることにも意欲的で『今日の給食紹介』をとても楽しみにしていて、幼児クラスの３色食品群にも興味をもっている。

＜本活動のねらい＞

・食べることに興味や関心をもつ。

＜本活動での教育的意図＞

・食材を知り、見ることで、意欲的に食べようとする気持ちを育む。

子どもと保育者の姿　保－保育者　調－調理員　子－子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○保育者が今日の給食メニュー”味噌ラーメン”の拡大写真を見せながら『給食紹介』をする。 保　「今日の給食、何か知ってる？ （少し間をおいて）味噌ラーメンです」 子　「やったー」 保　「味噌ラーメンの中には、何が入ってるかな？」 A　児　「ちゅるちゅる。」 保　「そうだね、ちゅるちゅるの麺が入ってるよね」と言いながら袋麺を見せる。 保　「この黄色いのはなーんだ」 B　児　「トウモロコシ」 保　「うん、そうだね。トウモロコシだよね」と実物のトウモロコシを見せる。 子　「トウモロコシ」「(かわ）むいた」「ちょうだい」 保　「そうそう！この前、みんなで皮をむいて食べたね。今日は、先生がむくから見ててね」 子　保育者が皮をむく様子をじっと見つめる。 子　「でてきた」「トウモロコシ」「見せてー」	体　食材に興味をもてるように、給食の写真を拡大し、はっきり分かるようにする。 徳・知　子どもたちの言葉を受け止めて話すことで、聞いてもらった満足感が得られるようにする。また、子どもの発語を繰り返したり、言い換えたりして物の名前を知らせる。 知　言葉と実物を結び付けたり経験したことを言葉に置き換えて知らせたりすることで、話したい気持ちを育む。 知　色の違いや野菜の名前を知ること

保 「ほら、黄色い粒々見えてきたよ。おいしそうだね。今日の味噌ラーメンに入ってるよ」 子 「やったー」 保 「じゃあ、この赤いのはなーんだ？」 子 「ニンジン」 保 「正解。ニンジンも入っているね」 子 「うん」 保 「ニンジンの体操、知ってるよね？みんなで体操しようか。いち、ニンジン、いち、ニンジン（かけ声）」 子 席を立ち、好きな場所に移動して、保育者の動きをまねながら笑顔で身体を動かす。 健康な心と体、生命尊重等 保 「みんなー、朝ごはんをいっぱい食べてきたから、元気もりもりだね」	ができるように、楽しい雰囲気の中で指さししながら知らせる。 体十分に身体を動かすことが楽しめるように、保育者も身体を動かしながら広い場所に誘導する。 体楽しんで体を動かしている姿を認めることで、食べることと体の関係に気付くようにする。
○電話の呼び出し音が鳴る。 保 「あれ、電話がかかってきたよ。誰かな？」 子 「クマさんかな？」 保 電話を取るまねをしながら「もしもし、あっ、給食の先生ですか？えっ！ネギがちょっとしかないんですか？分かりました。」と言って受話器を置く。 保 「クマさんじゃなくて、給食の先生だった。給食の先生が『ネギが少ししかない』って困ってた。みんなどうしよう？どこかにネギ、あったかな？」 子 「あっち」と外を指さす。 「探しに行こう」「外にある」 保 「そうだ！この前、みんなでプランターにネギを植えたよね。見に行こうか。」 子 「うん」「作戦」 保 「そうだね、今日のひみつの作戦は、味噌ラーメンを作ろうにしよう。それでは、出発！！」 子 「しゅっぱーつ。」	 知経験したことを思い出せるように働きかけ、もっと話したい、伝えたい気持ちを引き出す。 体菜園活動を通して、食材に興味や関心がもてるようにする。
○所庭に出る。 子 一目散にネギを植えているプランターに駆け寄り「あった！」と笑顔を見せる。 「こっちにもいっぱいある」 保 「ネギがあったね。大きくなってきてるよ。ほら、このはこれくらいだったのに、こんなに長くなってるよ」と身ぶりを交えて伝える。 子 自分からネギを抜こうとする。 保 「先生も抜いてみるよ。あっ、抜けた」 子 「緑だ」「なんか匂いする」 保 「緑色してるね。」「ほんとだ、ネギの匂いだね。」	徳言葉や身振りで伝えることで、ねぎの生長に気付くようにする。 徳自分からやってみようとする姿を認めたり、見守ったりしながら、興味や関心をもてるようにする。

子 「おひげみたい」と根を覗き込む。 自然との関わり、数量・図形、標識や文字などへの関心・感覚等 保 「ひげみたいだね。それ、根っこって言うんだよ。ネギはそこからお水飲んでるんだって。みんなもお水飲むよね」 子 抜いたネギを持って給食室に行こうとする 保 「給食の先生、待ってるかも。急いで持って行こう」 子 「うん」 ○給食室にネギを持って行き、調理の様子を見る。 調 「ネギを持ってきてくれたの。ありがとう。助かったわ。今から美味しい味噌ラーメン作るから、楽しみにしていてね」 保 「給食の先生がありがとうだって。みんながネギを持ってきてくれたから嬉しいんだね。今、みんなのネギ洗ってくれてるよ。」 子 「ぼくが採ったやつだ」と口々に言う。 保 「包丁でトントントンと切り始めたよ」 子 「ほんとだー」 〇しばらく見た後 保 「給食の先生が切ったネギを持ってきてくれたよ」 子 刻んだネギをじっと見たり、匂いを嗅いだりしている。 「ラーメンの匂いする」「お腹空いた」「早く食べたーい」 健康な心と体等 保 「そうだね。お腹空いてきたね。手を洗って給食を食べる用意をしようか」	徳・知 子どもの表現に共感しながら、より興味がもてるように言葉を添える。 徳 早く給食室に持って行きたい気持ちを受け止め、言葉に置き換えることで、友達のしていることに気付くようにする。 徳 自分がしたことをほめてもらうことで、相手も喜ぶことや自分も気持ちがよいことを感じるようにする。 体・徳 調理する様子を見たり、自分が抜いたネギを使ったりすることで、早く食べたいと期待をもてるようにする。 知 同じ食材でも実際に見ることで、形や匂いの違いに気付くようにする。

【考察】

・２歳児の食育・菜園の取組を考えた時、自分で植えた食べ物への関心を通じ、食べたいという気持ちを育むことが大切だと考えた。そこで、子どもが簡単に植えることができ、いつ見に行っても育っている野菜がいいと考え、ネギを選んだ。ネギを植えた後は、保育者が水遣りをする姿に興味をもち、一緒に水遣りを楽しむ姿もあった。『給食紹介』では、特にネギについて紹介し、自分が植えたものに興味や愛着を感じられるような働きかけを意識したことで、ネギだけでなく他の食材についても興味や関心が広がってきている。

（健康な心と体、自然との関わり、生命尊重、数量･図形、標識や文字などへの関心・感覚等）

今後に向けて

・食材を見たり、匂いを嗅いだり、体を動かしたりする活動や、食材の名前を知ったり、異年齢児の食育活動を見たりする活動を通して、「お腹が空いたら食べたい」という感覚や「食べることが楽しみだ」と思える気持ちを育んでいきたい。

事例 16

2 歳児 ＜ 徳 III期・11 月　人と関わる力 ＞

やったー！！かぶぬけた

～ 保育者や友達と一緒に“おおきなかぶごっこ”を楽しむ ～

＜これまでの経過＞

進級児 10 名　新入児２名　計 12 名のクラス。女児が多く普段からいろいろなごっこ遊びを楽しんでおり、ままごと遊びから、遠足ごっこやお店屋さんごっこなど経験したことを再現して遊ぶ姿も見られるようになってきた。また、運動会では、大好きな絵本に出てくるレスキュー隊になり、はしご登りやタイヤ引きで体を鍛えたり、火を消す真似をしたりなど楽しんだ。絵本や紙芝居を見た後、同じ遊びの中で、一人ひとりがイメージしたもの（登場人物や出てくる動物）になりきり、保育者が仲立ちになって、役を決めて遊ぶことも少しずつ増えてきている。

＜本活動のねらい＞

・友達や保育者と簡単なごっこ遊びを楽しむ。
・友達のしている遊びをまねて遊ぶことを楽しむ。

＜本活動での教育的意図＞

・絵本のストーリーから同じようなイメージをもつことで、友達や保育者と一緒に簡単なごっこ遊びを楽しめるようにする。

子どもと保育者の姿　保―保育者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○新聞紙を丸めたり、ちぎったりして楽しんだ後 保「新聞遊び、楽しかったね。みんなで新聞紙を集めてくれる？」 子「うん。どこに入れたらいいん？」 保「今日はこの大きな白い袋の中に入れてくれるかな」と言って、白い袋を見せる。 子 集めた新聞紙を袋に入れ始める。　協同性等 保「みんなが集めてくれたから、あっという間にお片付けできたね。助かったわ。ありがとう」と白い袋をカーテンの後ろに持って行く。	徳保育者の気持ちを伝えることで、満足感や自己充実感を味わえるようにする。
保2 葉っぱの付いたつるを素早く白い袋に付ける。 保「あれ？こんなところに何かあるよ」と言い、子どもたちにつるを見せる。 子「ほんとだ・・何かな・・」 保「先生ちょっと引っ張ってみるね！」と重たそうに引っ張ってみせる。「だめだ・・動かない・・」	知子どもたちが期待をもてるような小さなヒントを知らせることで、次の活動への意欲につなげていく。
A 児「なんか『おおきなかぶ』みたい！」 保「ほんとだね。もう一回引っ張ってみるね・・」と引っ張り始めると 子「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」と数名の子どもたちがかけ声をかけ始める。	徳子どもたちからの言葉を引き出しながら、活動の楽しさを感じられるようにする。
保「やっぱり動かないよ。どうしよう」 A 児「手伝おうか？」 保「手伝ってくれるの？助かるわ！先生が葉っぱを引っ張るからＡちゃんは先生を引っ張ってくれる？」	徳期待感を楽しさへとつなげていくことでもっと遊びたい意欲を引き出していく。

A　児「いいで！」 保・A児「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」 子　一緒にかけ声をかけ始める。 保　「先生とAちゃんだけだったら無理だったね。他の友達にも手伝ってもらおうかな」 A　児「Bくんも、Dくんも、一緒にしよう！」と周りにいる友達に向かって言う。　社会生活との関わり等 B　児「いいよ！Aちゃんを引っ張ったらいい？」と言いながらAちゃんの後ろに行く。 D　児「先生がおじいさんで、Aちゃんがおばあさんで、Bくんはイヌみたいやな！」　協同性等 子　「ほんまに『おおきなかぶ』みたいやぁ」と笑っている。 豊かな感性と表現、言葉による伝え合い等 保　「『おおきなかぶ』みたいに引っ張ってみようか」 保・子「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」 保　「抜けないな」 A　児「『おおきなかぶ』はネコも出てくるで」 B　児「そうだ。イヌがネコを呼んで来てたよな」 思考力の芽生え等 保　「みんなよく覚えてるね！ということは、ネコが来るんじゃない？」 D　児「ニャオー」 子　ネコの鳴き声のまねをする。 保　「わぁーネコがたくさん来てくれたわ。ありがとう」 A　児「ネコいっぱいだ。でも『おおきなかぶ』にはネズミ出てくるよ。ネズミいなかったら、カブ抜けへん」 保　「そうか。『おおきなかぶ』にはネズミがいたよね。絵本と同じにするの？」 A　児「うん」 保　「でも、みんなが引っ張ってる物、かぶかどうか分からないけど・・・」 D　児保育者とA児のやり取りを聞いた後、「ネズミやるよ」と言う。 保　「Dちゃん、ネコがやりたいんでしょう？いいの？」 D　児「いいよ。ネズミする」 E　児「ネズミでいいよ」　協同性、社会生活との関わり等 保　「Eちゃんもネズミをするの？いいの？」 E　児「いいよ。ネズミする！」と微笑む。 保　「Eちゃん、ありがとう！みんなEちゃんがネズミになってくれるって。よかったね。Aくん、これで絵本と同じになったよ。」 A　児「うん」 子　「先生、早く続きしよう」 保　「そうだね。じゃあ　みんなでネコを呼ぼう」	徳次にどうしたらいいのか方法を知らせながら、友達との関わりが広がるようにする。 知みんなで同じようなイメージがもてるように仲立ちとなり、子どもたちの言葉や動きを受け止めていく。 徳友達が遊んでいる姿を見て、やってみたいという気持ちがもてるように周りの子どもたちにも声をかけ気付かせる。 知子どもの気付きを受け止め、どうしたらいいのか方法を知らせながら子どもが考えようとする気持ちも引き出せるようにしていく。 徳子どもの気持ちに寄り添い、友達の思いなど知らせ、相手の気持ちが感じられるようにする。 徳保育者が一緒に遊びを進めることで、遊びが継続し楽しむことができるようにする。

子 「ネコさーん！！」 子 「はぁーい」返事をしながら、嬉しそうに出て来る。 保・子 ネコがイヌを引っ張って、イヌがおばあさんを引っ張って、おばあさんがおじいさんを引っ張って　おじいさんがかぶを引っ張って・・」 保・子 「うんとこしょ！どっこいしょ！うんとこしょ！どっこいしょ！」 A 児 「まだまだかぶはぬけません、だよね」と笑顔で言う。 保 「そうだね」 子 「早くネズミ呼ぼう！」「ネズミさーん！！」 D 児 「はぁーい」と返事をしながら、嬉しそうに出て来る。 保 「ネズミ、来てくれたよ！さあ、みんなで一緒に言ってみようかぁ」 保・子 「うんとこしょ！どっこいしょ！」 保 「スッポーン！」 ・カーテンの陰から、新聞紙の入った白い袋が出てくる。 A 児 「やったー！！かぶがぬけたー」 子 「わーぬけた！わ～い、わ～い！」 協同性、社会生活との関わり等 保 「ネコもイヌもネズミもみんなで一緒に引っ張ったもんね」	知・徳 子どもたちの自発的な行動や考えようとする気持ち、相手を思う気持ちを大切にし、みんなが同じイメージをもって遊ぶ楽しさを感じられるようにする。 徳 友達と遊んだ楽しさが感じられるように、一人ひとりの姿や気持ちを認める。

【考察】

・「おおきなかぶ」の絵本をイメージできるように葉っぱの付いたつるを用意したことで、子どもたちから「おおきなかぶ」という言葉が出てきて、みんなで同じようなイメージをもち、楽しむことができたと思われる。友達が遊んでいる姿をよく見ていて興味をもち、集まってきたり声をかけて誘ったりする姿は、日頃の遊びの中でも見られている。その中で、普段、自分の思い通りにならないと怒ったりすねたりする姿が見られる子どもが、やりたい役を友達に譲るなど、いつもとは違う姿が見られた。「おおきなかぶのお話にしたい」という思いがあったからこそ、楽しい、もっと遊びたいという気持ちから、友達に譲るという姿になったと感じる。また、譲ったことで遊びが続けられたということを２歳児なりに感じていたように考える。　**（思考力の芽生え、協同性、社会生活との関わり等）**

・絵本に出てくる言葉や知っている言葉を使って、子どもたちなりに伝えよう、表現しようとする姿が見られた。絵本を思い出しながら、「うんとこしょ！どっこいしょ！」のかけ声に合わせて体を動かしている保育者の姿を見て、同じようにまねをして体を動かし楽しんでいた。保育者が引っ張る動作を大きくしたり、言葉に節を付けたり工夫することで、遊びが広がり表現の仕方も変わっていったのではないかと感じる。　**（豊かな感性と表現、言葉による伝え合い等）**

今後に向けて

・日々の遊びの中でも、ごっこ遊びの機会を捉え一緒に遊ぶ中で、さらなる子ども同士の関わりや遊びを広げていくことができればと思う。また、子どもたちがイメージをもちやすいような環境を整えるなど、引き続き工夫していきたい。表現の仕方も、子どもたちからの動きをどんどん取り入れ、自分たちの思いが伝わる楽しさやみんなで同じイメージをもって遊ぶ楽しさが感じられるようにしていきたい。

『おおきなかぶ』　作：うちだりさこ（福音館書店）

事例１７

２歳児　＜　知　Ⅳ期・２月　　言語　＞

カエルおってよかったなぁ！！

～　保育者や友達と言葉のやりとりを楽しむ　～

＜これまでの経過＞

進級児 10 名　新入児２名　計 12 名のクラス。周りをよく見ていて、誰かが楽しそうなことを始めると集まって来る。好奇心も旺盛で、夏のプール活動では３歳児と一緒に入ったり、幼児の集会にも参加したりして刺激を受けている。

また、０・１歳児とは隣のクラスということもあり一緒に体操をするなど、日頃から保育室を行き来し、お兄ちゃん・お姉ちゃんぶりを発揮している。２歳児保育室の向かい側に事務所もあり、よく声をかけてもらい遊ぶ機会も多い。

体を動かしたり、所庭で活発に遊んだりすることや絵本、絵カード遊びなどが好きで、動物や野菜など一部分が写っていると「これは○○！」と答えたり、友達と当て合いっこをしたりして楽しんでいる。色や大きさ・形などにも興味を示し、知らないものが出てくると「これ何？」と聞きに来て、知ろうとする姿も見られるようになってきている。

＜本活動のねらい＞

・保育者や友達とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りの楽しさを感じる。
・色や大きさの違いが分かり、言葉で表現する喜びを感じる。

＜本活動での教育的意図＞

・思ったことや感じたことを自分なりの言葉で伝えようとし、相手に伝わる喜びを感じられるようにする。
・保育者や友達の姿をまねしながら、イメージを膨らませて遊ぶことの楽しさを感じられるようにする。
・色・形・大きさなどの違いが分かるようにする。

子どもと保育者の姿　保―保育者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○絵本「ぴょーん」を見る。 保　「本の中に何が出てきた？」 子　「バッタ！」「ネコ！」「カエル！」 保　「そうやね。いろいろ出てきたよね。」 「みんなもカエルみたいに、ピョーンって跳んでみる？」 子　「カエルはこうやって跳ぶねんで！」 「違うで、こうやで！」など、それぞれがカエルの真似をして楽しんでいる。 保　「そういえば、このお部屋にもカエルいるの知ってる？」 子　「えぇー？　カエル、ここにおるん？」 「どこやろ・・」と探し始める。 子　「分かった！これやろ！」と言いながら『かえるさんじ	徳共通のイメージをもって、遊びが広がり楽しめるような言葉をかけていく。 知子どもの表現を認め、もっと表現したいという次への意欲へとつなげていく。 知子どもの自発的な行動を大切にし、子ども同士で発見する楽しさが感じられるようにする。

ゃんぷ』の玩具を持ってくる。 保 「そうそう。よく分かったね。」と言いながら蓋を開ける。 「あれ？カエルがおれへん！」と空っぽの容器を見せる。 子 「ほんまや・・カエルおれへん・・」 「どこ行ったんやろ・・」 保 「どこに行ってしまったんやろね・・」 子 「ピョンピョン跳んで行ったんちがう？」 「そうや！跳んで行ったんや！」 豊かな感性と表現等 保 「どうする？みんなで探しに行く？」 子 「うん！探しに行く！」「みんなで探しに行こう！」 保 「どこを探す？」 子 「□□ぐみさんに行ってみよう」と言って隣のクラスに行く。 子 「カエル、来てませんか？」 保 2 「カエル？来てないよ！どうしたん？」 子 「○○ぐみのカエルがいなくなったの・・」 保 2 「えぇーそうなん？どこ行ったんやろね・・」 子 「いま、みんなで探してるの！」 保 2 「本当・・見つかるといいね」 保 「□□ぐみさんにはおれへんかったね」 子 「どこに行ったんやろ・・」「お外に行ってしまったんかな・・」 保 「ねぇ・・△△ぐみに行って保３先生に聞いてみる？」 子 「そうやね。保３先生なら知ってるかも・・」 「ほんまや！何でも知ってるもんな」 「聞きに行ってみよう！」と△△ぐみに向かう 子 「保３先生・・カエル、遊びに来てませんか？」 保 3 「カエル？どんなカエルなの？」 保 「みんなどんなカエルだったか覚えてる？」 子 「え～と・・赤いカエル！」 保 3 「赤いカエルなの？」 言葉による伝え合い等 子 「黄色いカエルもおったで！」 「おったおった！それから・・青いカエルもおったで！」 保 3 「みんなよく覚えてるね。赤いカエルと青いカエルと黄色のカエルやったね」 子 「まだおったで！緑色のカエル！」 「そうや！緑色のカエルもおったなぁ」 保 3 「大きいカエルだった？それとも小さいカエルだった？」と手で大きさを作りながら子どもたちに聞く。 子 「うーん・・このぐらいかな？」と少し大きめの丸を作る。「え～そんなに大きくないで！このぐらいやで！」と言いながらカエルの大きさぐらいの丸をつくる。 「そうそう！そのぐらいやったなぁ」	知 思ったことや感じたことを伝えようとする気持ちを受け止めると共に次への活動へとつなげていく。 知・徳 子どもたちからの言葉を引き出し、言葉のやり取りの楽しさを感じられるようにする。 知 子どもの気持ちに寄り添い、次にどうしたらいいのか考えようとする気持ちを引き出す。 知 知っている色の名前を伝えようとする気持ちを受け止めることで、もっと話したい気持ちを育む。

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等 保　3「赤色に青色に黄色に緑色・・で、この位の大きさ・・？あっ！もしかしてこのカエル？」と言いながらカエルを出す。 子「あぁ～それそれ！」 保　3「このカエルだったんだね。朝来たら△△ぐみに遊びに来てたから、どこから来たのかなって思ってたんだ」 子「カエルおってよかったな！」 「△△ぐみに遊びに来たかったんやね・・」 保「ほんとやね。カエルも遊びに来たかったんやね」 子「他にもおるかもしれへんで！探してみよ！」と言いながら別の部屋に探しに行く。 	知知っている大きさを伝えようとする気持ちを受け止めながら、ごっこ遊びを展開するきっかけをつくる。 知子どもたちの言葉を繰り返し、相手に伝わる喜びが感じられるようにする。 知・徳子どもの言葉を繰り返すことで、カエル（相手）の気持ちになって思いを伝えようとする気持ちを大切にする。

【考察】

・保育者の投げかけに対して、自分の思いや感じたことを言葉で伝えようとする姿だけでなく、身振り手振りを交えて伝えようとする姿が見られた。相手に伝えたいという気持ちが育ってきていることを感じる。日頃から、言葉遊びを楽しめるような絵本や遊びを取り入れていくことで、保育者とだけではなく、子ども同士のやり取りも盛んになってきている。本活動においても、子ども同士の自然なやり取りが見られた。　（言葉による伝え合い、豊かな感性と表現等）

・遊びの中で色の名前を知らせ、その都度、大きさや形なども意識して知らせるようにしている。普段、何気なく遊んでいる玩具にも色や名前、大きさの違いがあることを知り、相手に言葉で伝えられるようになっていることに成長を感じる。相手に伝わる喜びもしっかりと感じていたように思う。

（数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、言葉による伝え合い等）

今後に向けて

・保育者が子どもの発想や考えに共感し関わる中で、子どもたちに、『次はこうしたい』という思いが出てきている。今後は、子どもたちの思いをしっかりと受け止め、タイミングを見逃さず次への活動へとつなげていき、遊びを広げていきたい。また、どうしたらいいか、子どもたちだけでは考えられないときは、ヒントを出すなどして、子どもたちが気付いていけるような働きかけをしていきたい。引き続き、子どもからの言葉を引き出し、やり取りへとつなげていけるような活動や、遊びの中で形・色・数等に気付けるような取組を意識して取り入れたい。

・カエルの玩具を探す中で、カエルに関心をもてたように思う。本活動をみんなで経験したことを生かし、カエルになって遊んだり飼育したりするなど、カエルにより関心をもてる活動にもつなげたい。

事例１８

３歳児　＜　知　Ⅰ期・５月　　創造　＞

にょろにょろって。にょろにょろ！

～　絵本を通して、表現することを楽しむ　～

＜これまでの取組＞

４月当初は不安を抱きながら登園していた子どももいたが、指導者との信頼関係を築く中で、安心して登園するようになってきた。園生活の中では、いろいろな歌や絵本に触れながら、指導者と一緒に手遊びをしたり、音楽に合わせて踊ったり歌ったりして体を動かすことを楽しんできた。

園生活に慣れてきた５月、一人の子どもが動物になりきって手紙を取りに来た。それが徐々にクラス全体へと広まり、動物の真似をして手紙を取りにくる姿が見られるようになってきた。このように、それぞれの表現を楽しんできた子どもたちは、日を重ねるごとに友達の動きにも興味をもち始めているようだった。

また、これまで様々な絵本を楽しんできたが、読んでほしい絵本を指導者に持ってきたり、絵本の登場物の動きに興味をもって気付いたことを話したり、絵本の時間を楽しみにしている姿も見られた。

＜本活動のねらい＞

・絵本の中で大好きなところを見つけたり、面白さを感じたりする。
・指導者や友達と一緒に動物になりきって表現することを楽しむ。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・動物になりきりながら、橋を渡って遊ぶ楽しさを味わえるようにする。
・安心して自分の表現や思いを出せるようにする。
・指導者や友達と一緒に、体を動かすことを楽しめるようにする。

子どもと指導者の姿　指―指導者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○絵本『いっぽんばしわたる』を見る。 ○翌日 指　保育室にウレタン積み木を並べておく。 A　児走って渡ったり、歩いて渡ったりを何度も繰り返す。 B　児「橋や！」　健康な心と体等 子　登園し、身支度を終わらせると、ウレタン積み木を渡って行く。　健康な心と体、豊かな感性と表現等 C　児『いっぽんばしわたる』の絵本を手にし、ずっと見ていたが、その絵本を指導者に渡す。 指　「いろんな動物が橋を渡ってるね」	知同じ言葉が繰り返されている絵本を読み、言葉のリズムの面白さを感じられるようにする。 体興味を抱いた絵本の登場物と合うような遊具を置いておき、体を動かしたくなる環境を整える。 知絵本に興味をもって見ている子どもの思いを受け止め、その思いを共有する。 知友達と一緒に、引き続き身体を動かして表現する楽しさを感じられるように場を広げる。

指	床にビニールテープで大きなコの字を引いておき、その線の延長線にウレタン積み木を置いておく。	体 いろいろな体の動きを楽しめるように、道具の置き方を工夫し環境を整える。
指	「さっき、橋を渡っていた友達がいたね。そう言えば、この絵本、さっきＣくんが持って来てくれたけど、この絵本の中にもたくさんの動物が橋を渡ってたね」と言いながら動物の絵を見せる。	
子	♪いっぽんばし渡る　いっぽんばし渡る～と歌いながら、ビニールテープの上を歩き、ウレタン積み木の上に登ったり降りたりしながら進んで行く。	知 絵本に出てくるフレーズをリズムにのせて歌いながら誘いかけ、指導者や友達と一緒に身体で表現する楽しさを感じられるようにする。
指	「落ちないようにっと」	
Ｄ児	「Ｄちゃんウサギ！」と言って立ち上がり、手を上にあげ跳ねながら橋を渡っていく。 健康な心と体、豊かな感性と表現等	
指	「ウサギがやってきた！」Ｄ児を真似る。	
子	後ろに並び、列になって橋をウサギで渡っていく。 豊かな感性と表現等	知 一人ひとりの表現を受け止めて認め、安心して表現できるようにする。
Ｅ児	床をはい、進んでいく。	
指	「あ、Ｅくんヘビも渡るのかな」	知 子どもたちの表現を繰り返して他児に知らせ、表現したい気持ちを膨らませる。
子	ヘビをしているＥ児を見て、床をはって進んでいく。 豊かな感性と表現等	
Ｄ児	「先生、次クマやで！ほら！」と言って四つばいになる。	
指	「クマも橋から落ちないように渡っているね」	
子	それぞれがなりたい動物に変身して橋を渡っている。 思考力の芽生え等	徳 友達の表現に気付くように声をかけ、共有する喜びを感じられるようにする。
Ｅ児	飼育をしていたアオムシを見に行き、「あ！アオムシ」と言う。	
指	「アオムシ歩いてる？」	
Ｅ児	「うん！にょろにょろって。にょろにょろ！あはは！」と言いながら、身体をくねくねさせ橋の方へ進んで行く。 豊かな感性と表現等	知・徳 身近な生き物の動きを見て、その動きに興味をもったり、真似たりして楽しんでいる姿を認める
○何度も繰り返し遊んでいるうちに、進行方向から進んで来る友達にぶつかる場面が見られた。		
指	「（ウレタン積み木の端の方にしゃがんで）橋を渡る方はこちらで切符を渡してから渡ってくださいね」	体 室内で安全に遊べるように言葉がけをしたり、環境を整えたりする。
子	「はーい！」と返事をして、タッチしてから何度も繰り返し渡る。	徳 安全な遊び方をイメージできるように、普段から遊んでいるもの（切符）を伝えることで、ルールを分かりやすく知らせ、安心して遊べるようにする。
Ｆ児	（列を作って並んでいたがＧ児が前から来るのを見て）「そっち違う。こっちからやで」と後ろを指さす。 道徳性・規範意識の芽生え等	
Ｇ児	後ろに並びに行く。	徳・体 安全な遊び方について子どもが気付いたことを認め、他の子どもた
指	「ＦくんもＧくんも、よく気が付いたね」	

○その後も、ウレタン積み木の並べ方を変えたり、動物を変えたりしながら橋を渡り続けていた。	ちにもその気付きを言葉にして知らせることで、ルールを守って遊ぶ気持ちよさを感じられるようにする。

【考察】

・絵本の中に出てきた場面と似たような環境を実際につくることで、絵本で見た場面を思い出しながら、いろいろな動物が橋を渡る姿をイメージし、表現することを楽しんでいた。また、指導者が橋を渡る時に口ずさんだ歌のメロディが心地よく、子どもたちもすぐに歌うことができ、「落ちないように」というスリルと「渡りきる」という喜びを感じることができたと考える。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

・子ども自身が興味を抱いている生き物の動きを見て、その動きを表現遊びの中に取り入れている姿も見られた。子ども一人ひとりが絵本の好きな場面で、何に魅力を感じたかを指導者が察し、環境を整えていくことで、子ども自らが体を動かし表現したいという思いを抱くのではないかと考える。

（思考力の芽生え、豊かな感性と表現、自然との関わり・生命尊重等）

・動物になりきって橋を渡ることで、跳んだり、はったり、歩いたり、しゃがんで進んだりと、室内でいろいろな動きを楽しんでいた。少し段のある遊具を登ったり降りたりすることで落ちないように渡っていた子どもたちだが、進行方向から友達が来ると落ちそうになったり、ぶつかったりする姿が見られた。安全な環境のイメージができるように伝えたことは、気持ちよく遊べることに気付くきっかけとなったのではないかと思う。（健康な心と体、道徳性・規範意識の芽生え等）

今後に向けて

・動物になって橋を渡ることをきっかけに、いろいろな動きを楽しんだり、友達の表現を見たり真似をしたりして、イメージを広げて遊ぶ楽しさを感じ、様々な表現を楽しめるようにしていきたい。

『いっぽんばしわたる』　作：五味太郎　（絵本館）

事例１９

３歳児　＜　体　Ⅰ期・５月　　運動　＞

おでかけ、楽しかったね

～　フープの遊びを楽しみ、体を動かす心地よさを感じる　～

＜これまでの取組＞

４月から新しい環境になり、異年齢児に関わってもらうことで少しずつ園生活にも慣れてきている。好きな遊びを見つけて楽しむ姿も見られるようになっている。園庭でフープを使って遊んでいる異年齢児の様子に興味をもち、そばでじっと見ていることもあった。

＜本活動のねらい＞

指導者や友達と一緒に、フープでいろいろな遊びを楽しむ。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・フープの遊びに興味や関心がもてるようにする。
・フープを使っていろいろな遊びを楽しみ、体を動かす楽しさを感じられるようにする。

子どもと指導者の姿　指―指導者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○フープを人数分準備しておく。 子　フープを触ったり、くぐったりして遊び始める。 A・B児　フープの中に入り、電車ごっこを始める。 社会生活との関わり、健康な心と体等 指　「おもしろそう、電車に乗っておでかけしようか」と言いながら、フープの電車に乗ってリズム室に移動する。 指　「電車がリズム室に着いたよ」 「この電車、いろいろなものに変身させて遊ぼうか」 A　児　フープをこまのように回転させて遊ぶ。 指　「A ちゃんのフープ、クルクル回っているね。どうやって回したの？」 A　児　「こうやって、手でくるりってするの」 指　「先生もやってみよう」と言いながら A 児と一緒にフープを回す。 「A ちゃんのまねっこしたら、クルクル回った。楽しいね」 子　フープを回し始める。 B　児　「先生見て！」フープに乗ってピョンピョン跳ねる。 指　「フープに乗ったらピョンピョン跳ねるね。おもしろいこと見つけたね」	徳　指導者が誘いかけることで、子どもが安心して遊びを楽しめるようにする。 体　子どもの考えた遊びを大切にし、継続させながら、広い場所に移動できるように、指導者が誘いかけることで、十分に体を動かすことを楽しめるようにする。 知　A 児の遊び方をみんなの前で見せるようにすることで、他児も友達の遊びを知り、遊びに好奇心がもてるようにする。 知　考えたことをタイミングよく認め、指導者も一緒にすることで、他児への刺激となり、遊びへの意欲をもてるようにする。

子 B 児の姿を見て、フープに乗ってピョンピョン跳ねて遊び始める。 B 児「おでかけしてくる」 指「いってらっしゃーい！！」 C 児「ブーン」と言ってフープをハンドルのように回して走る。 指「D ちゃん、何に乗ってるの？」 D 児「車！」 子「私も」「ぼくも」 指「先生も車に乗ってみよう。ドライブ楽しいね。どこに行こうかな？」 D 児「（少し離れたところを指さしながら）あっちの公園！」 子「行こう、行こう！」 D 児「出発！！」 子「ブーン」と言ってリズム室を１周する。 D 児「次は、お店屋さん」 指「お店屋さんまではガタガタ、くねくねした道を通って行くけど、運転大丈夫かな？」 子「大丈夫！！」 指 進む速さを変えたり、体を上下させたりしながら移動し、「楽しかったね。そろそろお部屋に帰ろう」と言葉をかける。 D 児「電車に乗って帰る！」 E 児「車がいい」 自立心、思考力の芽生え等 指「好きな乗り物に乗って帰ろう！！」	体 フープを使った遊びを考えたり、試したりすることを通して、体を動かす心地よさを感じられるようにする。 体 子どもが体を動かすことを楽しめるように、動きに合わせて言葉をかけ、広い場所で存分に遊べるようにする。 体 指導者が積極的に遊ぶことで、遊びに弾みがつき、他児も一緒に楽しもうとして、みんなで遊ぶ楽しさが味わえるようにする。 体 指導者が一緒に遊びながら、変化のある動きを見せることで、体の部位を同じように使って楽しく体を動かせるようにする。 体 指導者が子ども一人ひとりの思いを受け止め認めることで、満足感や充実感をもてるようにする。

【考察】

・フープを手に取りやすい所に置いておくことで、子どもが主体的に遊ぶ姿が見られるようになった。フープの丸い形から、いろいろなものが連想でき、回したり、中に入ったり、中に入って動くなど、具体的なイメージをもって遊ぶ姿につながったと思われる。指導者が一人ひとりの遊びに気付き遊んだことで、フープを使って多様な遊びを一緒に楽しむことができた。

（健康な心と体、思考力の芽生え、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・友達と一緒に遊びながらイメージを共有し、ごっこ遊びに発展したり、フープの大きさを変えることで、挑戦する、競争するという遊びにつなげたりして運動機能の発達にもつなげていきたい。

事例２０

３歳児　＜　知　Ⅱ期・６月　　思考・創造　＞

“のんちゃん”もいっしょにいこう

～　身近な自然に興味や関心をもち、収穫をしたり、ごちそうをつくったりする　～

＜これまでの取組＞

５月中旬、子どもがカタツムリを持って来た。子どもたちと落ち葉を集めて、飼育できる環境をつくった。絵本「かたつむりののんちゃん」を読み聞かせたことから、さらにカタツムリに親しみをもち、“のんちゃん”と名付けた。“のんちゃん”に、「おはよう」と声をかけたり、手に乗せて動く様子を観察したりして親しみが増していった。

６月、歌『かたつむり』を子どもたちに知らせた後、「みんなで“のんちゃん”になって、お散歩に行こう！」と声をかけた。すると、体を丸める、いろいろな場所に隠れる、見つけ合うなど、カタツムリの様子を身体で表現するようになってきた。その後『“のんちゃん”をつくろう」と声をかけ、色紙を用意すると、指導者と一緒に折ったり模様をかいたりして、カタツムリの“のんちゃん”づくりが広がった。台紙や棒を付けると、自分の“のんちゃん”を喜んで動かす子どもが増えてきた。

＜本活動のねらい＞

・つくったカタツムリを持って散歩に行くことを喜び、畑の自然物に興味や関心をもって、見たり触れたりする。
・収穫の喜びを感じ身近な素材を使って、収穫した野菜や果物、お弁当のおかずなどをつくる。

＜本活動での教育的意図＞

・自分でつくったカタツムリを持って気持ちを弾ませて散歩をすることで、畑の様子を見たりカタツムリを触ったりして、身近な自然物に興味や関心をもてるようにする。
・畑に実っている野菜や果物を見つけたり、収穫したりした経験から、身近な素材を使って収穫物やお弁当のおかずなどをつくる、見立てて遊ぶなど、自分なりの方法で思いを表現できるようにする。

子どもと指導者の姿　指―指導者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○A児とB児は“のんちゃん（台紙や棒付きの自分がつくったカタツムリ）”を持ち、「かわいい」と見合って笑っている。しばらくすると２人は、保育室の出入口へ行き、“のんちゃん”を動かしている。 指　「のんちゃん、いろいろなところへ行けて嬉しそうね」 A　児「のんちゃんと、お散歩してくる」 A　児“のんちゃん”を持ち、かがみながら廊下に出て行く。 B　児ままごと遊び用のかばんに野菜の形をしたおもちゃを詰める。 指　「のんちゃんのご飯かな？お野菜大好きだもんね」 B　児嬉しそうにうなずき、“のんちゃん”に食べさせる。	 徳つくったものを大切にする気持ちが育つように“のんちゃん”に思いを寄せている姿に共感する。
道徳性・規範意識の芽生え、豊かな感性と表現等 指　「みんな、優しいね。のんちゃん喜んでいるよ。そうだ、今からお庭に、のんちゃんを連れて行ってあげようか？」 子　「うん。」「のんちゃんも、一緒に行こうな」 ♪でーんでんむーしむし～と歌いながら、畑に到着する。到着するなり“のんちゃん”を畝の上や栽培物の近くで動かし、「葉っぱいっぱいあるよー」と話しかけている。	知・徳楽しみながら園庭や畑を散策できるように自分でつくった愛着のあるものを持って畑に行くことを提案する。

自然との関わり・生命尊重、道徳性・規範意識の芽生え等 C　児 “のんちゃん”をゴーヤの前で動かしているうちに、葉にとまっている小さな虫を見つけ、「虫いてる！」と大声で言う。 指 「本当！虫さん、小さいのによく見つけたね。のんちゃんと一緒に見つけたね。何の葉っぱにとまってるのかなぁ？」 D　児「これなに？」 近くにいた5歳児「教えてあげようか？ゴーヤやで！」 子 「知ってる」「食べたことあるでー」「知らーん」と口々に言う。 指 「お兄ちゃん、よく知ってるね。ゴーヤの葉っぱはこんな形なんだねぇ」 子 葉っぱを見たり、触ったりする。 言葉による伝え合い、思考力の芽生え等 A　児「あ！見つけたー」と“のんちゃん”を持って別の畝へ行き、小さなナスを指さす。 道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え等 指 「よく見つけたね。野菜のあかちゃんができてるよ」 子 「見せてー」「ちっちゃい」「かわいい」 自然との関わり・生命尊重等 指 「野菜のあかちゃん、落ちると大きくなれないね。お花が咲いてるよ。きれいな色ね」 A　児「紫！」 指 「紫色のお花ね。前にもこのお野菜見たね・・」 A　児少し考えた後、「ナス」と答える。 指 「そうやね、ナスやね。Aちゃん、よく覚えていたね」 子 「ナスやねー」「ナスやねー」 指 「今日は、のんちゃんと一緒に畑で虫や野菜のあかちゃん見つけたね。また見つけたら先生やお友達に教えてね」 ○翌日からも子どもたちは、「いってきまーす」と“のんちゃん”と畑へ行き、「あった！」と実りに気付いたり、畝や野菜の葉の上をはわせたりしている。 言葉による伝え合い等 ○数日後、指導者が一人ひとりにかごを渡す。子どもたちは、「お買い物！」と喜び、指導者と畑に行く。 子 「先生、キュウリあるよ！」 「トマトできてる」「赤いトマト」と、大きな声で知らせる。 指 保育室で、収穫した野菜を一人ずつ見せ合う機会を設ける。 C　児「キュウリ！チクチク・・」 指 「本当やね。ナスは・・？」 E　児「ツルツル」ナスを触って言う。	知・徳自然や栽培物に興味や関心をもてるように子どもの発見した喜びに共感したり、他の年齢の子どもに親しみや憧れの気持ちをもてるようにやり取りができるような言葉をかけたりする。 知名前を知らせるとともに、色や形、手触りなどに気付くように言葉をかける。 徳見つけたことを十分に認め、他児にも広める。 知野菜の生長に気付いたり、大切にしたりしようとする気持ちがもてるように声をかける。 知気付いたことを喜んでを伝えられるように、体験を振り返ったり、その子どもなりに気付いたことを認め、同じ言葉で繰り返したりする。 徳一人ひとりが収穫の喜びを味わえるように、人数分のかごを用意する。 知いろいろな野菜の名前や大きさや感触などの特徴に興味がもてるように、自分で収穫した野菜を見せ合う機会をつくる。

F　児「ぼくはピーマン採った」 思考力の芽生え　自然との関わり・生命尊重等 ○以降、毎日のように、指導者と買い物かごを持って畑に行く。６月後半からは、ピーマン、ゴーヤ、エダマメ、オクラ、カボチャなども収穫でき、買い物かごがいっぱいになる日もあった。 ○７月初旬、赤や緑、ピンク等の紙や素材を保育室に用意しておく。 指　手で丸めて見せる。 子　興味をもち丸め出す。「トマト！」「えっと、ピーマン！」「モモつくった」などと、今まで園内で収穫した野菜や果物の名前を言う。豊かな感性と表現、思考力の芽生え等 指　小さく切った波段ボールを巻いて置いておく。 子　「タマゴ焼き」「これ、お肉！」「お弁当やねん」と言いながらつくる。 指　「おいしいものいっぱいつくったね。畑で見つけてくれたお野菜やモモもあるし、お弁当のおかずもあるし・・ごちそういっぱいね」 子　「おにぎりもほしい」「私はもっとモモつくりたい！」「食べてー」と言いながら４、５歳児のところに持って行く。豊かな感性と表現等 指　ままごとの皿や盆、小かごを用意する。 子　「いただきまーす！」と製作物を乗せたり入れたりして食べる真似をする。社会生活との関わり等 ○つくったごちそうが、日に日に増えていく。	 知つくることを楽しめるように、扱いやすくイメージに合うような素材を用意し、指導者が丸めて見せたり、自分なりに工夫してつくる様子を認めたりする。 知・体丸める、巻く、ちぎるなど見立てて遊ぶことが楽しめるように環境を整え、一人ひとりの表現を認め、意欲を引き出す。 徳子どもの言動から興味があることを把握し、友達と関わることが楽しくなるように、遊具等をタイミングよく用意する。

【考察】

・『のんちゃん』をお庭に連れて行こう」と誘ったことで、散歩に行くことが嬉しくなり、無理なく身近な自然に関わることができた。『のんちゃん』に、いろいろなところを見せてあげたい」という思いが、小さな虫や野菜を発見する活動につながった。

（道徳性・規範意識の芽生え、自然との関わり・生命尊重等）

・ゴーヤやナスなどを子どもが見つけた機会をとらえ、栽培物の名前や形、大きさなどに気付くように指導者が働きかけたことで、葉の形や手触り、花の色、実の大きさなどに興味や関心をもった。そして、活動を楽しむうちに、物の名称を知ったり、「キュウリはチクチク」と気付いたり、感じたりしたことを自分なりの言葉で伝えることを楽しんでいた。

（言葉による伝え合い、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重等）

・個人用かごを用意したことで、一人ひとりが自分で収穫する喜びを味わうことができた。年齢やそれぞれの子どもの実態を十分把握し、思いを受け止めていくことが大切である。興味をもっていることを自分なりに実現できるように、扱いやすくイメージに合うような素材を用意したことで、つくったり、見立てたりすることが楽しく、友達と関わって遊ぶことにもつながった。

（社会生活との関わり、思考力の芽生え、自然との関わり・生命尊重、豊かな感性と表現等）

今後に向けて

・興味のある遊びから、身の回りの事物・事象への気付きや発見を受け止めていきたい。また、実体験から新しい活動への興味や関心の幅を広げていきたい。

事例２１

３歳児　＜　体　Ⅲ期・９月　　運動　＞

先生、見て！できた！！

～　やってみようという気持ちをもって、体を動かすことを楽しむ　～

＜これまでの取組＞

体を動かす楽しさを味わえるように、いろいろな運動遊びに取り組んできた。子どもたちの中には、体を動かして意欲的に遊ぶ子どももいるが、中には、自分から入ろうとしなかったり、怖がったりする子どももいる。子どもが進んで体を動かして遊ぶことを楽しめるように環境を整えたり、遊びを工夫したりして取り組んできた。

＜本活動のねらい＞

・体を動かして遊ぶことを楽しむ。
・頑張って「できた」という経験を通して、満足感を味わう。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・友達と関わって遊ぶ中で、体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるようにする。
・運動遊びを通して、意欲的に取り組もうとする気持ちを育む。

子どもと指導者の姿　指―指導者　子―子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○指導者が、マットで山を作り、フープを並べる。 子　マットの山を登り下りしたり、フープでケンパをしたりして遊んでいる。 A　児　マットの近くに行って、友達の様子を見ている。 指　「A ちゃんもやってみる？」 A　児　「怖いよ～」 指　「A ちゃん、座って足から下りてみてー。ゆっくり下りたら大丈夫だよ。」 A　児　「怖いよ～」 指　「じゃぁ、A ちゃん、一緒にしてみようか？」と A 児に両手を差し出す A　児　指導者の手を持って、マットの山をゆっくり登り下りしてみる。　健康な心と体、自立心等 指　「できたね！やったー！」 A　児　少し笑っている。 指　「A ちゃん、もう１回してみようか？」 A　児　「うん」と言って、指導者の手を持って、登って下りる。「できた！」　健康な心と体、自立心等 ○翌日	体　体を動かして遊ぶことで楽しさを味わえるように、日頃から親しんで遊んでいるマットやフープを使って環境を整える。 知　体の動かし方を分かりやすい言葉に置き換えることで、理解しやすいようにする。 徳　マットの山を降りることができたという経験をすることで、不安感が軽減し満足感や達成感を感じられるようにする。 体　少し頑張ったらできるという目標がもてるように高い山、低い山の２つを用意し、自分で選んでできるような環境を整える。

指　前日と同じ高さの山と、少し低めの山の２つを用意する。 A　児マットの山を前に立ちすくんでいる。 指　「大丈夫、できるよ。こっちの山でやってみる？」と低い山ですることをすすめ、A 児のことを見守る。 A　児指導者や友達を見た後、自分で低い方の山に登り、ゆっくり下りる。　健康な心と体、自立心、思考力の芽生え等 A　児「下りれた～！」 指　「自分で下りられたね！」 子　「A ちゃん、できたね～！」 A　児何度も低い山を自分で登り下りしていた。 ○翌々日 指　前日と同じようにマットとフープを用意する。 A　児友達と一緒に、マットやフープで遊んでいる。 「先生、見て！できた！！」と言いながら、自分でマットの山を何度も登ったり下りたりしている。 子　「Aちゃん、自分でできるようになったで～。」 指　「すごいね、自分で下りられるようになったね。」 健康な心と体、自立心、協同性等	徳指導者の援助で、マットの山を下りることができたという経験を振り返ることで、自分でもしてみようという意欲を引き出す。 徳少し頑張ったらできたという達成感を認め共感する。 徳友達と一緒に遊ぶ楽しさが感じられるように環境を整える。 徳毎日同じ環境にすることで子どもが安心し、何回も挑戦しようとする意欲をもてるようにする。 徳自分でしようとする意識が育まれるように、「できた」という喜びに指導者が共感し認めていく。

【考察】

・子どもたちが「やってみたい」と思う活動や遊びを取り上げたが、一人ひとりの興味やできることは違うので、同じ活動でもそれぞれに合わせた援助の仕方や、声かけを工夫することが必要だと感じた。指導者も一緒に動きながら、必要な援助や助言をすることで、子ども自身が「できた」「やってみよう」という自信や意欲をもつことにつながった。

（健康な心と体、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

・少し頑張ったらできるであろう目標がもてるように活動を取り入れたことは、A児が自ら「低い山を選んでやってみよう」「やってみたらできた」という達成感や喜びになっている。このことが、自己肯定感につながっていると思われる。また、毎日同じ環境での遊びをを保障することで安心し、何度でも挑戦しようとする気持ち（意欲）が育まれたと感じる。

（健康な心と体、自立心等）

・今回は、指導者から誘いかけたが、すぐに活動に参加しなくても、友達の様子をじっと見ている姿を認め、タイミングを見ながら背中を押すことも必要だと考える。（自立心等）

今後に向けて

・継続した活動に少しずつ変化を取り入れることで、子どもが無理なく楽しみながら、意欲をもち活動に取り組めるようにしていきたい。

事例２２

３歳児　＜　徳　Ⅲ期・１０月　　規範意識　＞

駅に来たら、代わってね

～　友達と遊具で遊ぶ中で、順番や交代することを知る　～

＜これまでの取組＞

・いろいろな活動に興味があり、何でもやりたいという気持ちをもつ子どもが多く、「自分がやりたい！自分が先に！」と強く自己主張するところもある。

・順番を待つことや交代する場面では、オモチャや場所を取り合う姿がしばしば見られる。所庭では、２台しかない２人乗りの三輪車に乗りたい子どもが、三輪車を取り合ったり、代わってほしい気持ちを友達に伝えられなかったりすることがよく見られ、その都度、指導者が仲立ちとなり、共同の遊具の使い方を工夫しながら気付かせるようにしてきた。

＜本活動のねらい＞

・順番や交代などの約束・ルールを守ることで、気持ちよく遊べることを知る。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・一人ひとりの気持ちを受け止めながら遊ぶ中で、順番や交代など約束・ルールを守ることの大切さを知らせていく。

子どもと指導者の姿　指－指導者 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○２人乗りの三輪車をめがけて、Ａ児とＢ児が所庭に飛び出して行った。Ａ児が先に三輪車をつかんだが、Ｂ児も無言で三輪車を持ったまま離そうとしない。 Ａ　児「Ａが先やった！」 指　「どうしたの？」 Ａ　児「Ａが先やったのに、Ｂちゃんが三輪車に乗った」 指　「Ｂちゃんも、三輪車に乗りたいんやね」 Ｂ　児うなずく。 指　「ＢちゃんもＡちゃんも乗りたいんやね。どうしたらいいかな・・・」 Ａ・Ｂ児黙っている。 指　「ＡちゃんとＢちゃん交代で乗ったらどうかなあ？」 Ａ・Ｂ児うなずく。 指　「じゃあ、Ａちゃんが先に乗って、後でＢちゃんに代わってもらったらどうかな。Ｂちゃんは、後で貸してって言おうね」	徳それぞれの遊びたい気持ちを受け止めて、まず、子どもが安心感を持つことができるようにする。 知自分の思いや考えを自分なりの表現で伝えられるよう仲立ちをしていく。 徳自分の気持ちをなかなか言葉にできないＢ児にＡ児の思いを伝えたり、相手にどう伝えたらよいのかを具体的に知らせたりして、思いを代弁することで他者との関わり方を知らせていく。 知自分で考える力が育まれるよう、保育者が具体的な方法を提示しながら進めていく。

A・B児 うなずく。 協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	
B　児 「あとで、貸して」と指導者に促されて、言うことができ、指導者と一緒に、A児に交代してもらうまで待つことになった。 協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	知 相手に伝えるための適切な言葉を知らせる。
指 「がまんできて、えらかったね。先生と一緒に待っていようね」	徳 指導者が仲立ちとなって、子ども同士の関わりの中でルールを作ったり、守ったりできるようにしていく。
A　児 しばらく乗った後、「あとで、代わってな」とB児に三輪車を渡した。 道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等	徳 約束が守れた（自分の気持ちをコントロールできた）ことを受け止め、認めることで、自分から約束・ルールを守ろうとする気持ちをもてるようにしていく。A 児には交代できたことを認めて、約束・ルールを守ってよかったという気持ちを持たせるようにする。
指 「Aちゃん、えらかったね。ちゃんと交代できたね」	
B　児 嬉しそうに三輪車に乗っているが、しばらくたっても一向に代わる気配がなく、指導者が声をかけても知らん顔をしている。	
A　児 「先生、Bちゃんいっぱい乗ってんのに代わってくれへん」	
指 地面に円をかき、そのそばにベンチを置き、B児に「ここは、駅でーす！一周してきたら、ここで代わってくださーい！」と言葉をかける。	知 印を付けたりベンチを置いたりして駅をつくり、交代のタイミングが目で見てわかるようにする。
C　児 もう１台の三輪車に乗っていたが、指導者の言葉を聞き一周回って駅のところに来て交代する。 道徳性・規範意識の芽生え、協同性等	徳 駅に見立てることで、楽しみながら交代できるようにし、「交代する」という約束・ルールを具体的に知らせる。
B　児 C児が交代している姿を見ていた。そして、駅まで来ると、三輪車から降りた。	
指 「Bちゃん、上手に交代できたね。駅で待ってたら、また、三輪車に乗れるよ」	徳 交代できたことを認めて、自然に約束・ルールを守って遊べるように誘導し、順番に乗ることで、みんなが楽しめることに気付かせていく。
B　児 うなずく。	
指 子どもの様子を見ながら、約束が定着するまで、「ストップ！」「交代でーす！」と言葉をかけるようにした。	徳 友達と楽しさを共感できるように指導者が仲立ちとなり、一緒に遊ぶことを楽しいと思う気持ちを育んでいく。
○他の子どももたくさん集まり列になって並んでいたが、順番に一周ずつして交代している。B児も笑顔で交代している。そのうち子ども同士で誘い合い、２人乗りの前後で役割を分担しながら三輪車に乗る姿も見られ、お互いが譲り合いながら遊ぶ姿が見られる。 健康な心と体、協同性、道徳性・規範意識の芽生え等	
指 「三輪車に順番に乗ったり貸してあげたりして、みんながルールを守ったから、楽しく遊べてよかったね。また、みんなで一緒に遊ぼうね」	徳 約束・ルールを守り楽しく活動できたことを認め、自分から約束・ルールを守ろうとする態度につなげていく。

【考察】

・３歳児のこの時期は、言葉で「順番よ」「交代しよう」と言われても、なかなか理解できないことが多い。特にＢ児にとっては「あとで」という曖昧な言葉では交代するタイミングが分かりにくかったようである。交代を分かりやすく『駅』という目に見えるものにすることで、「交代する」ことが理解できた。始めは指導者の投げかけや支援によって交代していたが、「交代する」ことがだんだん分かってくると、自分たちだけで交代しながら乗ることができるようになった。このように、子どもが見通しをもちやすい方法で援助し、自分も相手も気持ちよく遊べることに気付くような指導者の関わりを、日々の保育の中で意識することが大切であると分かった。

（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、思考力の芽生え、言葉による伝え合い等）

・友達と楽しく遊ぶ経験を重ねる中で、指導者が友達との関わり方や集団の中での遊び方を繰り返し知らせることで、少しずつ自己コントロールできる力が育まれる。指導者は、子どもの思いを受け止めながら、規範意識を育むことを意識し、機会を捉えて援助や仲立ちをしていくことが必要である。

（自立心、協同性、道徳性・規範意識の芽生え、言葉による伝え合い等）

・保護者に対しては、「今の時期はまだ自分の気持ちを相手に伝えることが難しく、ぶつかり合いも多い。その中で、相手とどのように折り合いをつけていくかを知っていくことが、人間関係を築いていくうえで大切である」と伝えていきたい。家庭と保育所や幼稚園とで連携をとり、してはいけないことや約束事をどのように子どもに伝えていくかを一緒に考え、共通理解していくことが、規範意識を育む基盤になると考えられる。（道徳性・規範意識の芽生え等）

今後に向けて

・子どもから出てくる『楽しく遊ぶための工夫や発見』を見逃さず、指導者が具体に子どもに示すなど、友達と経験したことを生かしたことを遊びに取り入れていきたい。

事例２３

３歳児　＜　徳　Ⅲ期・１０月　　人と関わる力　＞

先生見て！お芋になったよ

～　友達と一緒に表現する楽しさを味わう中で、人と関わる力を育む　～

＜これまでの取組＞

虫探しが好きで、友達と一緒に見つけたチョウの卵を育て、アオムシを大切に扱ったり、成長を喜んだりしてきた。虫をきっかけに、絵本や図鑑にも興味や関心が広がり、手に取る姿も見られるようになってきた。

地域の畑で芋掘りをすることが決まってからは、サツマイモについての絵本を見たり、話をしたりして、活動への期待がもてるようにしていった。

＜本活動のねらい＞

・経験したことを存分にかくことで満足感を感じ、友達と楽しさを共有する。

＜本活動での教育的意図＞

・子どもの「かきたい」という気持ちを受け止め、心地よさを感じられるようにする。
・共に体験してきたことを、友達と一緒に表現することが“楽しい”と感じられるように、また、その気持ちを共有できるように、指導者が仲立ちとなり、意欲的に活動できるようにする。

子どもと指導者の姿　指ー指導者　子ー子ども 幼児期の終わりまでに育って欲しい姿	視点子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
○芋掘りの翌日 指　「昨日のお芋掘りでどんなことがあった？」 子　「虫おったー」「お芋いっぱい掘った」 指　「そうだね。みんなの大好きな虫もいたし、お芋もたくさんあったよね。今から、昨日のお芋掘りで掘ったサツマイモをかきたいと思います」 子　「やったー！お芋食べたい！」「かいたお芋食べる！！」「葉っぱもかく！」 言葉による伝え合い、豊かな感性と表現、思考力の芽生え等 指　「今日はね、これを使ってかこうと思うんだけど」と言いながら、あらかじめ準備していた袋の中から絵筆を取り出して見せる。 子　「やったー！新しいやつ（絵筆）だ！」と大喜びする。 指　「いろいろな形のお芋の絵がかけるように、太い筆や細い筆と広い畑（紙を見せる）を用意したよ」 子　「大きいのとか、ちっちゃいのとかいっぱいあったもんね」 思考力の芽生え、数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚等	知指導者の話に興味がもてるように、また、昨日の楽しかった経験を思い出せるように伝え方を工夫する。 徳子ども一人ひとりのいろいろな思いや表現をしっかり受け止め、安心して自分の思いや考えを表現できる雰囲気を作る。

○子どもたちも手伝いながら床一面に紙を貼っていく。 自立心、協同性、思考力の芽生え等 子 「昨日の畑みたいに大きいな」「お芋の絵をかくぞ～」「（本物の）お芋みたい」「こんな紫（のお芋や～）」「オレンジ色のお芋もある！」 自然との関わり・生命尊重等 ○初めは絵筆を使ってかいていたが、そのうち、かいた絵の上を手でぬたくり始める。 子 「お芋になった！」と絵の具がついた手足を見せ合い、微笑み合う。 豊かな感性と表現等 ○紙に隣同士にかかれていた 2 個のサツマイモを指導者が見つける。 指 「ちっちゃいお芋と大きいお芋が仲良くしてるね～」 子 「へんなお芋になってる～」 指 「雪だるまの形みたいだね」 子 「ほんまや。こっちのは『さつまのおいも』みたいに、でっかいよ」「これ、ヘビみたいに細いよ」 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚、豊かな感性と表現等 指 「大きいのや小さいの、細長いのや、太いの、いろいろな形のサツマイモがあったね。こっちの畑（紙）にはどんなサツマイモがあるかな」 子 模造紙の空白を見つけ、かき始める。 自立心、協同性、豊かな感性と表現等 指 「見て見て～。こっちの畑にはおいしそうなサツマイモがたくさんあるよ」と言いながら床から模造紙を外して子どもたちに見せる。 ○部屋中の床が絵の具で汚れていることに気付く。 指 「ここ、なんか大変！お昼ご飯食べるから、綺麗にするね」と言いながら雑巾とバケツを準備し始める。 子 「わたしも お掃除するー！」「ぼくもー」 子どもたちが指導者の姿を見て、雑巾を探そうとする。 自立心、協同性等 指 「大変！ここ取れへん！！」 子 「消えたー！！」「取れた！！」「頑張るぞー！！」 道徳性・規範意識の芽生え、社会生活との関わり等 指 「手伝ってくれるの。ありがとう。みんなで頑張ろうね！！（床を見て）「きれいになってきてるね」「先生の雑巾は、こんなふうになってるよ」と汚れた雑巾を見せる。 子 雑巾を見せ合い、もっともっと拭き取ろうと、しばらくみんなで雑巾がけに夢中になる。 自立心、協同性、健康な心と体、社会生活との関わり等	知 子どもと一緒にいろいろな素材の紙を床一面に敷き詰めることで、広い畑をイメージできるようにする。 徳 自分の思いや考えを十分に表現できるように、楽しい雰囲気の中で、子どもの思いをしっかり受け止め、引き出していく。 徳 安心して思い切り表現できるような環境を工夫するとともに、指導者と一緒に準備する中で、自分で貼る場所を考えたり、友達と協力したりできるようにしていく。 知 子どもが表現した様々な形を正しい言葉に置き換えることで、形の違いや名称に気付かせる。 徳 もっと表現したい、かきたいという気持ちが高まるように、一人ひとりの思いを聞き、かいたものを認めていく。 徳 みんなで完成を喜び合えるよう、かいたお芋の絵をみんなで見る機会をつくり、子どもの表現したものを、指導者が言葉を添えて認めることで、安心感と次への意欲がもてるようにする。 知・徳 生活に見通しがもてるように言葉をかけることで、協同の場所をもとに戻すことの大切さに気付かせていく。 徳・体 指導者が率先して雑巾がけをしていき、子どもたちが、自分も手伝おうという気持ちがもてるように導いていく。 徳・体 みんなで力を合わせて協力したので、早くきれいな床になったことをみんなで確認し、満足感や充実感をもたせる。

【考察】

・前日に芋掘りの経験をしたことや保育室全体を畑に見立てられるように、いろいろな素材の紙を床一面に貼ったことで、サツマイモをかくというイメージにつながり「かきたい！」という気持ちになった。また、子どもたちがその気持ちを共感できたことで「友達と一緒にサツマイモをかく活動」が楽しいものになったのではないかと思う。　（健康な心と体、豊かな感性と表現等）

・指導者は、一人ひとりが表現した絵や言葉をしっかりと受け止め、共感したことが、一人ひとりの気持ちを満足させ、このことを周りにも気付かせる指導者の関わり方が、子ども同士の関係を深めるための仲立ちになると考える。　（健康な心と体、自立心、社会生活との関わり等）

今後に向けて

・友達との違いやよさに気付き、互いに認め合えるように、指導者が仲立ちとなり友達と一緒に活動する機会をもつ。

事例２４

３歳児　＜　知　Ｖ期・２月　　創造　＞

飛行機できた！見て、見て

～　身近な素材に興味や関心をもち、つくることを楽しむ　～

＜これまでの取組＞

自宅から持ってくる素材を「お宝」と呼び、素材を使った遊びがクラスの遊びの一つとなり、継続している。初めは、素材を接着することを楽しんでいたが、次第に素材を生かした形や色合いなどを考えて接着したり、つくったもので遊んだりすることを楽しみ、友達同士で見せ合ったり、まねてつくったりする姿が見られた。

＜本活動のねらい＞

・いろいろな素材に触れ、工夫しながらかいたりつくったりして表現することを楽しむ。

＜本活動での指導者の教育的意図＞

・いろいろな素材に存分に触れ、興味や関心がもてるようにする。
・イメージしたことをかいたりつくったりして表現できるようにする。

子どもと指導者の姿　指ー指導者　子ー子ども 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿	視点　子どもに育てたいこと 教育的意図をもった働きかけ
A　児 素材を持って登園する。 B　児 「A ちゃんが、お宝を持って来てくれたよー」と指導者や友達に伝える。 自立心、社会生活との関わり、言葉による伝え合い等 指 「何を持ってきてくれたのかな」 A　児 「いっぱい箱を集めてきたよ。C くん、この箱好き？」 C　児 「うん、好き」 A　児 「どうぞ」　社会生活との関わり、協同性等 指 「Bくん、その箱を C くんにあげるんだね。Cくん、よかったね、嬉しいね。」 子 素材を興味深く見る。 D　児 「D はこの箱使いたい。この棒みたいなのもいる。これでつくりたいな」　思考力の芽生え、豊かな感性と表現等 指 「何をつくろうと思ってるの？何ができるか楽しみだね」 D　児 朝の用意を早く終え、素材遊びの準備をする。はさみを使ってティッシュの箱にラップの芯や牛乳パックを貼って、イメージする形をつくり、絵をかいたり飾りを付けたりする。	知 素材で遊ぶことを楽しみにしている思いに共感し、素材に興味や関心をもち、遊びへの意欲を高める。 徳 友達の優しさに気付き、喜びを感じられるように言葉をかける。 知 身近な素材に興味や関心、遊びへの意欲を受け止めることで、自分の思いを表現する楽しさが十分に味わえるようにする。